

## IV 生物多様性

西多摩地域に残る貴重な自然環境が広く存在するあきる野市においては、生物多様性は重要な話題となっています。

この貴重な自然環境を存続させるため、我々、森林レンジャーは、主な活動の一つである生物調査を、1年を通して実施しています。

本調査は、平成22年から実施している、市内の哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、魚類及び昆虫類（主にトンボ類、チョウ類、甲虫類など）の分布などの生息調査です。

生き物の生息場所などのデータを分析し、地区別に生物多様性の現状について、大まかに把握することで、今後の保全に役立てています。

なお、平成23年からは、希少種などの調査を強化し、平成24年からは、希少種の中で指標種となる重要な種類を中心に調査を行っています（絶滅危惧種の確認及び希少種の特別調査）。

以下は、これまでの森林レンジャーあきる野活動報告書の更新データや追加内容です。

### 1 動物調査の最新データ（動物総合調査・絶滅危惧種の確認）（パプロ）

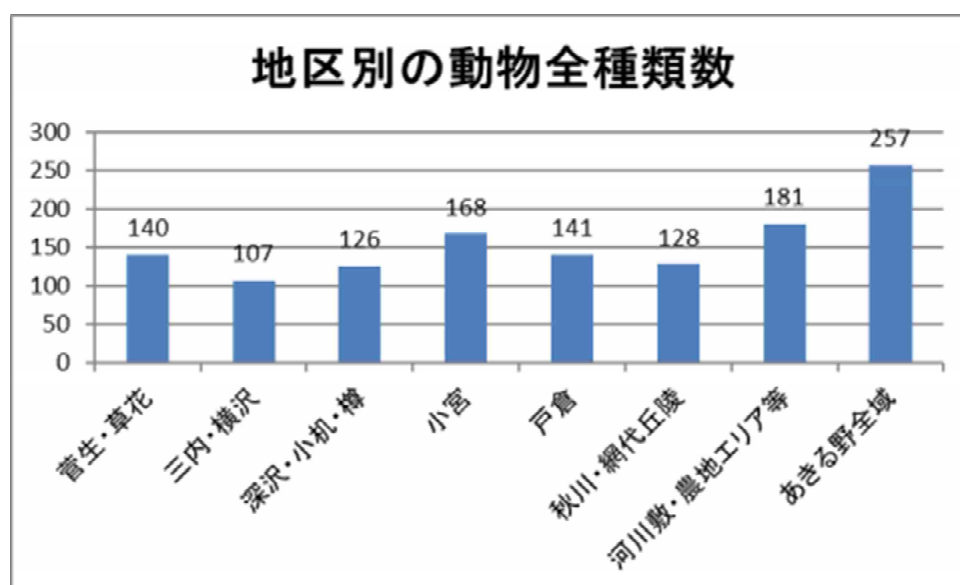
#### ○ あきる野市の動物総合データについて

これまでの調査期間（平成21～令和3年度）に、あきる野市全域で確認した動物種数は、哺乳類（33種類）、鳥類（167種類）、爬虫類（16種類）、両生類（15種類）、魚類（26種類）、昆虫類など（670種類）の合計で、全種類927種類となります。その内、昆虫類などの一部は調査不足、又は調査を行っていないため、現在生息する種類の数はもっと多いものと推測しています。

次の表は、これまで確認した動物総合データを地区別に示したものです。

地区又はエリア	哺乳類	鳥類	爬虫類	両生類	魚類	全種類
菅生・草花	17	96	12	10	5	140
三内・横沢	16	70	8	11	2	107
深沢・小机・樽	22	80	11	9	4	126
小宮	26	108	11	9	14	168
戸倉	18	92	8	11	12	141
秋川・網代丘陵	20	82	9	12	5	128
河川敷・農地エリア等	14	126	15	11	15	181
あきる野全域	33	167	16	15	26	257

- ※ 外来種含む（21種類）
- ※ 赤字は地区別の最大値
- ※ 昆虫類などは除く



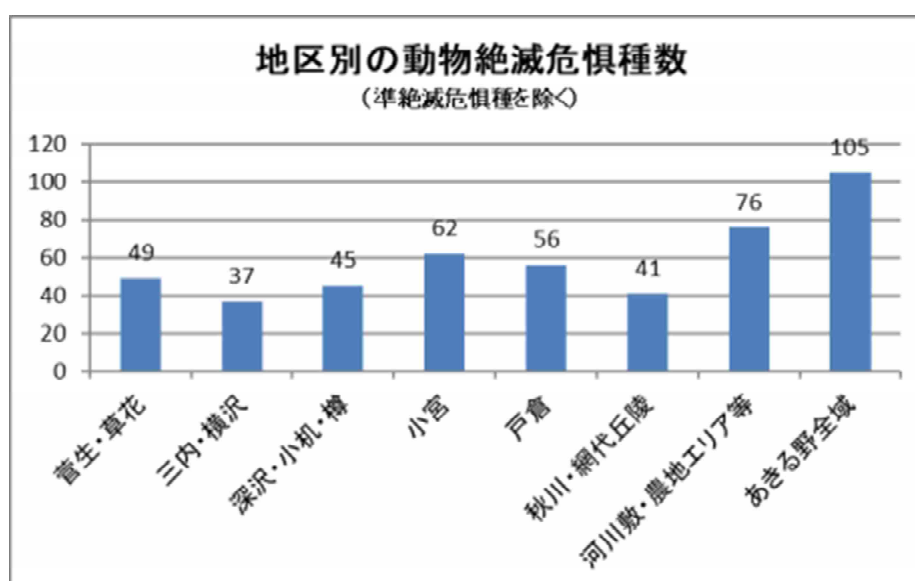
#### ○ 絶滅危惧種の確認について

これまで、あきる野市全域で確認した絶滅危惧種の数、動物の105種類に昆虫類の32種類を合わせると137種類に上ります。結果、全動物927種類中、絶滅危惧種が占める割合は14.8%になります。なお、今回は新たに作成されたあきる野市版レッドリストや、『東京都レッドリスト（本土部）2020年版』により、様々な分類の指定種に変化があったため、前回の実績報告書で示した数字とは多少異なります。

〈地区別の動物絶滅危惧種数（準絶滅危惧種や情報不足の種を除く）〉

地区又はエリア	哺乳類	鳥類	爬虫類	両生類	魚類	全種類
菅生・草花	1	30	9	7	2	49
三内・横沢	1	19	6	9	2	37
深沢・小机・樽	3	26	9	6	1	45
小宮	4	38	9	5	6	62
戸倉	2	33	8	7	6	56
秋川・網代丘陵	0	24	7	8	2	41
河川敷・農地エリア等	1	54	9	8	4	76
あきる野全域	5	69	11	10	10	105

※ 赤字は地区別の最大値



生物多様性の面では、動物の総合種数において、河川敷・農地等のエリア（181種類）と小宮地区（168種類）が引き続き上位となっています。同様に、絶滅危惧種についても、河川敷・農地等のエリアは総合的に（76種類）と小宮地区（62種類）が上位となり、小宮地区と同様に市の奥山環境を広く含む戸倉地区（56種類）でも多くの絶滅危惧種を確認しました。

このことから、市内の自然豊かな中山間地域や秋川などの河川環境、最も重要と思われる標高の高い山地のコナラ・ミズナラなどの二次林が生物多様性に重要であることが明らかになっています。

#### ○ 新たに確認した重要な種類について

令和元～3年度までは、「哺乳類・鳥類・爬虫類・両生類・魚類」の動物については絶滅危惧種10種類を含め、あきる野市で新たに哺乳類1種類（ヤマネ）、鳥類15種類

(ウズラ、マガン、ヒドリガモ、トモエガモ、カンムリカイツブリ、ナベヅル、クイナ、ヒクイナ、タゲリ、ケリ、アオアシシギ、ショウドウツバメ、オオムシクイ、マミチャジナイ、ホオアカ) や魚類1種類(スナヤツメ)を確認しました。

また、昆虫類なども数多く確認している中で、新たに5種類の絶滅危惧種(サラサヤンマ、カトリヤンマ、ゴイシシジミ、シンジュサン、オビグロスズメ)の他に、市内においての希少種(ネブトクワガタ、マルタンヤンマ、ウラゴマダラシジミやギンイチモンジセセリなど)、又は初記録とされる種類(カバマダラ)などを確認しました。

新たに確認した上記の種類についての詳細は、以下のとおりです。

#### ヤマネ (*Micromys minutus*)

令和元年の春、五日市周辺の森林で動物の夜間観察を行っている最中に1頭を目撃しました。確認済の情報提供以外、これまではセンサーカメラによりヤマネらしき小型哺乳類を確認していましたが、今回は初めての直接的な確認例となります。

#### ウズラ (*Coturnix japonica*)

個体数が非常に少ないとされる希少なウズラは、令和2年5月上旬に日の出町との境界に位置する農地で鳴き声や目視(1羽)により確認しました。それ以外の確認例はないため、渡りの途中の個体であったと推測しています。近年はウズラに関する情報は非常に少なく、東京都や環境省でも絶滅危惧種に指定されています。

#### マガン (*Anser albifrons*)

ガンの仲間の中で、最も個体数が増加している種類とされます。基本的には冬鳥として東北地方などまで南下しますが、東京都まで南下することも極稀にあります。令和3年10月に、秋川下流部の田んぼ地帯で1羽の飛来を確認しましたが、北から東北への渡りのピークよりも早く、しかも普段南下しない範囲であることから、オーバーシュート(渡り鳥が本来止まるべき場所を超過してしまう現象)による迷鳥であったと思われる。

#### ヒドリガモ (*Anas penelope*)

ガンカモ類の調査実施により、以前、あきる野市の境界付近で一時的に確認したことがあります。その後、市内で令和2年11月に1羽を確認し、その後は令和3年の秋の渡りの時期に多摩川上空を飛んだ複数個体を確認しました。ヒドリガモは、全国的に数多く飛来しますが、数の減少が心配されるガンカモ類の一種です。なお、あきる野市周辺に飛来する機会が少なく、全く見られない年もあります。

#### トモエガモ (*Anas formosa*)

これまで確認していなかった希少なトモエガモは、令和元年の11月にオス1羽、令和3年2月にオス2羽メス1羽、令和4年2月にオス4羽メス4羽の3回も市内で確認しました。また、市外の記録ではありますが、令和3年12月にはあきる野市の境界付近でも3羽を確認したため、飛来頻度や個体数の増加が期待できる種類と思われます。

#### カンムリカイツブリ (*Podiceps cristatus*)

ヒドリガモと同様、以前から市外の多摩川などの境界付近で確認することがありましたが、令和元年12月に確認した1羽が市内で初の正式な記録になりました。比較的に、広い湖沼に飛来するため、あきる野市では適する環境はあまりありませんので、稀に一時滞在する野鳥であると見ています。

#### ナベヅル (*Grus monacha*)

環境省で絶滅危惧Ⅱ類に指定されているナベヅルは、令和2年10月に多摩川や秋川の河川敷などの上空で旋回しながら横断したところを目撃することができました。希少な冬鳥で、関東地方は渡りのコースからかなり離れているため、当地域で確認することは極めて珍しいとされます。今回の例は、渡りの途中で休憩や餌場を探している最中の行動であったと思われますが、実際に市内で一時滞在したかは不明です。

#### クイナ (*Rallus aquaticus*) / ヒクイナ (*Porzana fusca*)

ガンカモ類の調査を強化した結果、令和2年から、冬～春の間に多摩川の河川敷で目撃しています。両種は数が少ない野鳥で、特に多摩川の河川敷で生息に適した環境が残っていますが、草などの生い茂りで身を隠すことが多いことから、鳴き声以外では確認しにくい種類です。

#### タゲリ (*Vanellus vanellus*) / ケリ (*Vanellus cinereus*)

以前から情報提供や記録がありましたが、令和2年の秋にこの2種を市内の河川敷で目撃することができました。生息に適する農地や草地などの開放的な環境の減少が続くこの地域では、飛来することは稀です。

#### アオアシシギ (*Tringa nebularia*)

令和元年9月に、渡りの途中とみられる1羽が多摩川で休憩や採餌する場面を確認しました。以前から確認しているキアシシギと同様、この地域で見られるのは少数かつ稀で、春や秋の渡りの時期に限ります。

#### ショウドウツバメ (*Riparia riparia*)

令和2年の秋に数回にわたり、多摩川や秋川の河川敷で複数個体が他のツバメの群れと交り、エサを探す姿や渡りを行う行動を確認しました。以前から目撃情報があり、この地域では、年によって、数多く渡ると考えられます。

#### オオムシクイ (*Phylloscopus examinandus*) / メボソムシクイ (*Phylloscopus xanthodryas*)

令和元年の大型台風後、上養沢の渓谷の山林でオオムシクイとみられる1羽を目撃しました。同様に、メボソムシクイは、令和2年8月の秋の渡り時期が始まる頃、養沢の山地で1羽を目撃しました。この2種類はあきる野市周辺で繁殖や長い滞在を行わない渡り鳥であるため、情報があまりありません。

#### マミチャジナイ (*Turdus obscurus*)

以前から秋の渡りの時期の目撃情報がありましたが、令和2年10月、秋川沿いの農地や民家と樹林地が混在している里山エリアでの1羽の目撃が、この調査で唯一の確認例となっています。上記のムシクイの仲間と同じ扱いをされる渡り鳥です。

#### ホオアカ (*Emberiza fucata*)

令和4年1月、秋川の広いオギやススキ原で1羽の目撃が唯一となります。以前から渡りの時期での目撃情報がありますが、年々情報が少なくなっていました。台風による河川敷の増水被害が相次いだ2010年代(平成22年から平成31年)にススキ原などの環境は減少しましたが、河川敷の植生環境が復活した場合は、広い範囲に飛来する確率が高くなると見えています。

#### スナヤツメ (スナヤツメ種群) (*Lethenteron reissneri complex*)

令和3年4月、多摩川河川敷内のワンドの浅いところで1個体を目撃し、本調査で初記録となりました。数少ないとされる希少なスナヤツメを確認するのは困難であるため、生息密度などの詳細は把握しにくい魚類です。

#### カトリヤンマ (*Gynacantha japonica*)

令和2年7月及び令和3年8~10月の間に、数回にわたり多摩川や秋川の河川敷付近の樹林内で確認しています。

#### サラサヤンマ (*Sarasaeschna pryeri*)

令和2年6月、五日市地区周辺の広葉樹林の林縁部で飛行する姿を確認したのが、現時点で唯一の確認例となっています。

#### トゲアリ (*Polyrhachis lamellidens*)

令和元年以降、市内の丘陵地帯から奥山部の豊かな広葉樹林帯で確認しています。環境省で絶滅危惧種に指定されていますが、様々な場所で確認しているため、増加傾向にあるのか、又はアリの仲間に関する調査不足に当てはまる種類の可能性があると見ています。

#### ゴイシシジミ (*Taraka hamada*)

令和2年10月及び令和3年9月、五日市地区周辺の同じ草地で1個体ずつを確認しました。東京都で絶滅危惧種に指定されており、現在は、個体数が非常に少なくなっていると思われます。

#### シンジュサン (*Samia cynthia*)

10年ほど前、市の境界付近で成虫を確認しましたが、市内では、令和2年8月に五日市地区周辺の広葉樹林で幼虫を確認することができました。『東京都レッドリスト(本土部)2020年版』で新たに絶滅危惧種に指定され、本調査においてはこの2回のみ確認となっています。

#### オビグロスズメ (*Sphinx crassintriga*)

令和2年10月、菅生草花丘陵の広葉樹林で幼虫を1個体のみ確認しました。上記のシンジュサンと同様、『東京都レッドリスト(本土部)2020年版』で新たに絶滅危惧種に指定され、非常に数が少ないと思われます。

その他、希少なネブトクワガタ (*Aegus laevicollis*) を市内の山地2か所で複数個体確認しました。また、マルタンヤンマ (*Anaciaeschna martini*)、ミヤマチャバネセセリ (*Pelopidas jansonis*)、ギンイチモンジセセリ (*Leptalina unicolor*)、ウラゴマダラシジミ (*Artopoetes pryeri*) やカバマダラ (*Danaus chrysippus*) を多摩川の河川敷で確認しました。さらに、新たに確認した種類の中で、養沢地区の山地ではメスアカミドリシジミ (*Chrysozephyrus smaragdinus*)、五日市地区周辺の里山ではオオウラギンスジヒョウモン (*Argyronome ruslana*) を確認できたことも貴重なことであると考えています。

なお、迷チョウのカバマダラを除き、いずれも市には数は少なく、生息する環境が限られているため、今後は絶滅危惧種などに指定される可能性がある種類です。

以上、これまでに希少種など多くの種類の生息場所の確認ができたことは、本調査を継続した成果と言えます。

また、調査で得られた新たな記録の大部分は、河川敷などの水辺環境で発見したこと

から、このような自然環境があるため、希少な生き物が多いことを示す結果であると言えます。その反面、外来種が最も多く確認できる環境にもなっています。

さらに、市の丘陵地帯などの豊かな広葉樹などの二次林でも多くの発見がありました。が、スギやヒノキなどの植林が広がる地域では、新たな発見が少なく、生物の多様性が乏しい環境であることを実感し続けています。

なお、平成21～30年で既に多くの種類を確認しましたが、近年は、確認できなくなっている数種類の野鳥（ブッポウソウ、コルリ、サメビタキ、エゾムシクイなど）や、確認する機会が少なくなった数種類（ヤマセミ、カッコウ、ジュウイチ、コマドリ、キクイタダキなどの野鳥や、ウラミアカシジミやメスグロヒョウモンなどのチョウ）は、激減や絶滅の危惧という傾向を示しています。

（一部の詳細は以下の貴重野鳥の調査報告で確認できます。）

## まとめ

前回の実績報告書では以下のように記載しました：

「本市は、秩父多摩甲斐国立公園の境目に位置し、生き物にとって重要な山地や東京都では貴重な河川、農地といった自然環境が残っています。さらには、里山もあるため、生物の多様性がみられる主な理由となる代表的な三つの自然環境（奥山・里山・河川）がこのコンパクトな地域に揃っています。この位置関係や地形、これまで人間が残してきた自然の重要性をよく理解した上で、今後もこの地域の自然をより大切にしていくな必要があります。自然が多様で貴重な生き物も多く生息している一方で、その自然環境の悪化や消失も見受けられます。人為的な影響などもあるため、今後は重要な自然環境の保全に繋がるゾーニングなどが必要であると推測しています。」

改めて、改善すべき森林や河川敷の環境問題（スギやヒノキの植林、増加したニホンジカなどや外来種の対策、さらには、違法行為への対策を含む自然に親しむマナーの強化など）に取り組む必要があると考えています。今回の報告で示したように、河川敷では大変貴重な希少種も多く確認していますが、人間活動による影響はとて大きく見受けられ、様々な問題が日常的に起きています。釣り人や川遊びなどのマナー（山地の渓谷でも目立つ問題）、地域ネコの対応、さらには、増加したドローンやラジコンなどの利用者など、様々な課題が挙げられるため、新たな対策を検討する必要があると思われます。

以下は、これまで確認した各レッドリストで指定されている種類（注目種を除く）の一覧や、新たに確認した種類の一部の写真です。

〈これまで市内で確認した指定種の一覧〉

No.	類名	科名	和名	学名	指定ランク		
					あ き る 野 市	東 京 都	環 境 省
1	哺乳類	オナガザル	ニホンザル	<i>Macaca fuscata</i>	NT	NT	
2		ヤマネ	ヤマネ	<i>Glirulus japonicus</i>	NT		
3		ネズミ	カヤネズミ	<i>Micromys minutus</i>	DD	VU	
4		トガリネズミ	ニホンジネズミ	<i>Crocidura dsinezumi</i>	NT	DD	
5			カワネズミ	<i>Chimarrogale platycephalus</i>	DD	NT	
6		キクガシラコウモリ	コキクガシラコウモリ	<i>Rhinolophus cornutus</i>	VU	NT	
7			キクガシラコウモリ	<i>Rhinolophus ferrumequinum</i>	VU	VU	
8		ヒナコウモリ	ヤマコウモリ	<i>Nyctalus aviator</i>	VU	VU	VU
9			ヒナコウモリ	<i>Vespertilio sinensis</i>	NT	NT	
10		クマ	ツキノワグマ	<i>Ursus thibetanus</i>	NT	NT	
11		ウシ	ニホンカモシカ	<i>Capricornis crispus</i>	NT	VU	
12	鳥類	キジ	ウズラ	<i>Coturnix japonica</i>	DD	CR	VU
13			ヤマドリ	<i>Syrnaticus soemmerringii</i>		VU	
14			ニホンキジ	<i>Phasianus colchicus</i>	VU	NT	
15		カモ	マガン	<i>Anser albifrons</i>			NT
16			オシドリ	<i>Aix galericulata</i>	VU	VU	DD
17			オカヨシガモ	<i>Anas strepera</i>	EN		
18			ヨシガモ	<i>Anas falcata</i>	VU	CR(EN)	
19			ヒドリガモ	<i>Anas penelope</i>	VU		
20			ハシビロガモ	<i>Anas clypeata</i>	VU		
21			オナガガモ	<i>Anas acuta</i>	NT		
22			トモエガモ	<i>Anas formosa</i>		DD	VU
23			コガモ	<i>Anas crecca</i>	NT		
24			ホシハジロ	<i>Aythya ferina</i>	NT	VU	
25			キンクロハジロ	<i>Aythya fuligula</i>	VU		
26		ホオジロガモ	<i>Bucephala clangula</i>	VU	EN		
27		ミコアイサ	<i>Mergellus albellus</i>	VU	VU(EN)		
28		カイツブリ	カイツブリ	<i>Tachybaptus ruficollis</i>	NT	NT	
29		ハト	アオハト	<i>Treeron sieboldii</i>		NT	
30		サギ	ミソゴイ	<i>Gorsachius gossagi</i>	EN	EN	VU
31			ゴイサギ	<i>Nycticorax nycticorax</i>	NT	NT(VU)	
32			ササゴイ	<i>Butorides striatas</i>	EN	VU	
33			チュウサギ	<i>Egretta intermedia</i>		NT	NT
34			コサギ	<i>Egretta garzetta</i>	NT	NT(VU)	
35		ツル	ナベツル	<i>Grus monacha</i>			VU
36		クイナ	クイナ	<i>Fallus aquaticus</i>	NT	NT	
37			ヒクイナ	<i>Porzana fusca</i>	DD	CR	NT
38			バン	<i>Gallinula chloropus</i>	EN	VU(EN)	
39			オオバン	<i>Fulica atra</i>	NT	(CR)	
40		カッコウ	ジュウイチ	<i>Hierococcyx hyperythrus</i>	VU	NT	
41			ホトトギス	<i>Cuculus poliocephalus</i>	NT	NT	
42			ツツドリ	<i>Cuculus optatus</i>	VU	NT	
43			カッコウ	<i>Cuculus canorus</i>	EN	VU	
44		ヨタカ	ヨタカ	<i>Caprimulgus indicus</i>	EN	VU(EN)	NT
45		アマツバメ	アマツバメ	<i>Apus pacificus</i>		DD	
46			ヒメアマツバメ	<i>Apus nipalensis</i>	DD	DD(NT)	
47		チドリ	ケリ	<i>Vanellus cinereus</i>	DD	DD	DD

48		イカルチドリ	<i>Charadrius placidus</i>	NT	NT(VU)	
49		コチドリ	<i>Charadrius dubius</i>	EN	NT(VU)	
50	シギ	ヤマシギ	<i>Scolopax rusticola</i>	CR	VU	
51		タシギ	<i>Gallinago gallinago</i>	EN	VU	
52		アオアシシギ	<i>Tringa nebularia</i>		NT	
53		クサシギ	<i>Tringa ochropus</i>	NT	VU	
54		キアシシギ	<i>Heteroscelus brevipes</i>	NT	VU	
55		イソシギ	<i>Actitis hypoleucos</i>	NT	VU	
56		ミスゴ	ミスゴ	<i>Pandion haliaetus</i>	VU	DD(EN)
57	タカ	ハチクマ	<i>Pernis ptilorhynchus</i>	EN	CR	NT
58		トビ	<i>Milvus migrans</i>		(NT)	
59		ツミ	<i>Accipiter gularis</i>	VU	VU	
60		ハイタカ	<i>Accipiter nisus</i>	NT	VU	NT
61		オオタカ	<i>Accipiter gentilis</i>	EN	VU	NT
62		サシバ	<i>Butastur indicus</i>	CR	CR	VU
63		ノスリ	<i>Buteo japonicus</i>	NT	(VU)	
64		クマタカ	<i>Nisaetus nipalensis</i>	CR	EN	EN
65	フクロウ	オオコノハズク	<i>Otus lempiji</i>	EN	EN	
66		コノハズク	<i>Otus scops</i>	CR	EN	
67		フクロウ	<i>Strix uralensis</i>	VU	VU(EN)	
68		アオハズク	<i>Ninox scutulata</i>	EN	VU(CR)	
69	カワセミ	アカショウビン	<i>Halcyon coromanda</i>	CR	CR	
70		カワセミ	<i>Alcedo atthis</i>		NT	
71		ヤマセミ	<i>Megaceryle lugubris</i>	CR	EN	
72	ブッポウソウ	ブッポウソウ	<i>Eurystomus orientalis</i>	CR	CR	EN
73	キツキ	アリスイ	<i>Jynx torquilla</i>	DD		
74		アカゲラ	<i>Dendrocopos major</i>	NT	(NT)	
75		アオゲラ	<i>Picus avokera</i>		(NT)	
76	ハヤブサ	チョウゲンボウ	<i>Falco tinnunculus</i>	VU	NT(VU)	
77		コチョウゲンボウ	<i>Falco columbarius</i>		DD	
78		チゴハヤブサ	<i>Falco subbuteo</i>		DD	
79		ハヤブサ	<i>Falco peregrinus</i>	EN	CR	VU
80	サンショウクイ	サンショウクイ	<i>Pericrocotus divaricatus</i>	CR	CR	VU
81		リュウキュウサンショウクイ	<i>Pericrocotus tegimae</i>	DD	DD	
82		サンコウチョウ	<i>Terpsiphone atrocaudata</i>	EN	VU	
83	モズ	モズ	<i>Lanius bucephalus</i>		NT	
84	カラス	オナガ	<i>Cyanopica cyanus</i>		NT	
85	クワイタダキ	クワイタダキ	<i>Regulus regulus</i>	VU	VU	
86	ヒバリ	ヒバリ	<i>Alauda arvensis</i>	EN	VU	
87	ツバメ	コシアカツバメ	<i>Hirundo daurica</i>	DD	NT	
88		イワツバメ	<i>Delichon dasypus</i>		NT	
89	ウグイス	ヤブサメ	<i>Urosphena squameiceps</i>		NT	
90	ムシクイ	メボソムシクイ	<i>Phylloscopus xanthodyras</i>		VU	
91		エソムシクイ	<i>Phylloscopus borealoides</i>	CR	VU	
92		センダイムシクイ	<i>Phylloscopus coronatus</i>	NT	VU	
93	ヨシキリ	オオヨシキリ	<i>Acrocephalus orientalis</i>	NT	VU	
94	セッカ	セッカ	<i>Cisticola juncidis</i>	VU	VU	
95	ゴジュウカラ	ゴジュウカラ	<i>Sitta europaea</i>		NT	
96	キバシリ	キバシリ	<i>Certhia familiaris</i>		NT	
97	ミソサザイ	ミソサザイ	<i>Troglodytes troglodytes</i>		NT	
98	カワガラス	カワガラス	<i>Cinclus pallasi</i>		NT	
99	ヒタキ	トラツグミ	<i>Zosterops dauma</i>	NT	NT(VU)	
100		クロツグミ	<i>Turdus cardis</i>		NT	

101			アカハラ	<i>Turdus chrysolaus</i>	VU		
102			コマドリ	<i>Luscinia akahige</i>	VU	VU	
103			コルリ	<i>Luscinia cyane</i>	CR	EN	
104			イソヒヨドリ	<i>Monticola solitarius</i>	DD	DD(NT)	
105			サメビタキ	<i>Muscicapa sibirica</i>	DD	NT	
106			コサメビタキ	<i>Muscicapa dauurica</i>	NT	VU	
107			オオルリ	<i>Cyanoptila cyanomelana</i>	NT	NT	
108		イワヒバリ	カヤクグリ	<i>Prunella rubida</i>	NT	NT	
109		セキレイ	セグロセキレイ	<i>Motacilla grandis</i>		NT	
110			タヒバリ	<i>Anthus rubescens</i>		NT	
111		アトリ	ハギマシコ	<i>Leucosticte arctoa</i>		DD	
112			ヘニマシコ	<i>Uragus sibiricus</i>	NT	NT	
113			ウソ	<i>Pyrrhula pyrrhula</i>		VU	
114			イカル	<i>Euphona personata</i>		NT	
115		ホオジロ	ホオジロ	<i>Emberiza cioides</i>		NT	
116			ホオアカ	<i>Emberiza fucata</i>	CR		
117			カシラダカ	<i>Emberiza rustica</i>	NT	NT(VU)	
118			ミヤマホオジロ	<i>Emberiza elegans</i>	VU		
119			クロジ	<i>Emberiza varabilis</i>		EN	
120			オオジュリン	<i>Emberiza schoeniclus</i>	VU	NT	
121	爬虫類	イシガメ	ニホンイシガメ	<i>Mauremys japonica</i>	CR	CR	NT
122		スッポン	ニホンスッポン	<i>Pelodiscus sinensis</i>	CR	CR+EN	DD
123		トカゲ	ヒガシニホントカゲ	<i>Plestiodon finitimus</i>	NT	NT(VU)	
124		カナヘビ	ニホンカナヘビ	<i>Takydromus tachydromoides</i>	NT	NT(VU)	
125		タカチホヘビ	タカチホヘビ	<i>Achalina spinalis</i>	NT	NT(VU)	
126		ナミヘビ	シロマダラ	<i>Lycodon orientalis</i>	VU	NT(VU)	
127			ジムグリ	<i>Euprepophis conscibillatus</i>	NT	NT(VU)	
128			アオダイショウ	<i>Elaphe climacophora</i>	NT	NT	
129			シマヘビ	<i>Elaphe quadrivirgata</i>	NT	NT(VU)	
130			ヒバカリ	<i>Hebius vibakari vibakari</i>	NT	NT(VU)	
131			ヤマカガシ	<i>Rhabdophis tigrinus</i>	VU	VU	
132		クサリヘビ	ニホンマムシ	<i>Gloydius blomhoffii</i>	VU	EN	
133	両生類	サンショウウオ	トウキョウサンショウウオ	<i>Hynobius tokyoensis</i>	EN	EN	VU
134			ヒガシヒダサンショウウオ	<i>Hynobius fossigenus</i>	VU	VU	VU
135		イモリ	アカハライモリ	<i>Cynops pyrrhogaster</i>	EN	EN	NT
136		ヒキガエル	アズマヒキガエル	<i>Bufo japonicus formosus</i>	NT	NT	
137		アマガエル	ニホンアマガエル	<i>Dryophytes japonica</i>	VU	NT	
138		アカガエル	タゴガエル	<i>Rana tagoi tagoi</i>	NT	NT	
139			ナガレタゴガエル	<i>Rana sakuraii</i>	NT	NT	
140			ニホンアカガエル	<i>Rana japonica</i>	CR	EN	
141			ヤマアカガエル	<i>Rana ornativentris</i>	NT	VU	
142			ツチガエル(*1)	<i>Glandirana rugosa</i>	EN	VU	
143			トウキョウダルマガエル	<i>Pelophylax porosus porosus</i>	EN	EN	NT
144		アオガエル	シュレーゲルアオガエル	<i>Zhangixalus schlegelii</i>	VU	NT	
145			モリアオガエル	<i>Zhangixalus arboreus</i>	NT	NT	
146			カジカガエル	<i>Buergeria buergeri</i>	VU	NT	
147	魚類	ヤツメウナギ	スナヤツメ種群	<i>Lethenteron reissneri complex</i>		CR	VU
148		ウナギ	ニホンウナギ	<i>Anguilla japonica</i>		EN	VU
149		コイ	ギンブナ	<i>Carassius sp.</i>		DD	
150			オイカワ	<i>Opsarichthys platypus</i>		DD	
151			アブラハヤ	<i>Phoxinus lagowskii steindachneri</i>		NT	
152			ニゴイ	<i>Hemibarbus barbuis</i>		NT	
153		ドジョウ	〈またはキタドジョウ〉	<i>Misgurnus anguillicaudatus</i> 〈 <i>Misgurnus sp.</i> 〉		DD(CRI) <EN>	NT
154			ヒガシシマドジョウ	<i>Cobitis sp. BIWAE type C</i>		NT(VU)	

155			ホトケドジョウ	<i>Lefua echigonia</i>		EN	EN
156		ギギ	ギバチ	<i>Tachysurus tokiensis</i>		VU	VU
157		サケ	ニッコウイワナ	<i>Salvelinus leucomaenis pluvius</i>		CR	DD
158			ヤマメ	<i>Oncorhynchus masou masou</i>		EN(CR)	NT
159		メダカ	ミナミメダカ	<i>Oryzias latipes</i>		CR	VU
160		カジカ	カジカ大卵型	<i>Cottus pollux</i>		EN	NT
161		ハゼ	ヨシノボリ(*2)	<i>Rhinogobius</i> sp.		CR/EN	
162		昆虫類	アオイトトンボ	アオイトトンボ	<i>Lestes sponsa</i>		VU
163	オツネイトンボ			<i>Sympecma paedisca</i>		CR	
164	ホソミオツネイトンボ			<i>Indolestes peregrinus</i>		EN	
165	カワトンボ		アオハダトンボ	<i>Calopteryx japonica</i>		VU(EN)	NT
166			ニホンカワトンボ	<i>Mnais costalis</i>		EN	
167	モノサシトンボ		モノサシトンボ	<i>Copera (Pseudocopera) annulata</i>		VU	
168	イトトンボ		キイトトンボ	<i>Ceragrion melanurum</i>		EN	
169			オオイトトンボ	<i>Paracercion sieboldii</i>		CR	
170	ヤンマ		ルリボシヤンマ	<i>Aeshna juncea</i>		VU	
171			カトリヤンマ	<i>Gynacantha japonica</i>		EN	
172			サラサヤンマ	<i>Sarasaeschna pryeri</i>		VU(EN)	
173	サナエトンボ		ヤマサナエ	<i>Asiagomphus melaenops</i>		VU	
174			ホンサナエ	<i>Shaogomphus postocularis</i>		VU	
175			コサナエ	<i>Trigomphus melampus</i>		EN(CR)	
176	ムカシヤンマ		ムカシヤンマ	<i>Tanypteryx pryeri</i>		EN	
177	ヤマトンボ		コヤマトンボ	<i>Macromia amphigena amphigena</i>		NT	
178	トンボ		ハラビロトンボ	<i>Lyriothemis pachygastra</i>		NT	
179			シオヤトンボ	<i>Orthetrum japonicum</i>		NT	
180			マユタテアカネ	<i>Sympetrum eroticum</i>		NT	
181			ヒメアカネ	<i>Sympetrum parvulum</i>		VU(EN)	
182			ミヤマアカネ	<i>Sympetrum pedemontanum elatum</i>		NT(VU)	
183			リスアカネ	<i>Sympetrum risi risi</i>		NT	
184			チョウトンボ	<i>Rhyothemis fuliginosa</i>		VU(NT)	
185	バッタ		ナキイナゴ	<i>Mongolotettix japonicus</i>		NT	
186			クルマバッタ	<i>Gastrimargus marmoratus</i>		NT	
187			カワラバッタ	<i>Eusphingonotus japonicus</i>		EN	
188	セミ		ハルゼミ	<i>Teranosia vacua</i>		EN	
189	タイコウチ		タイコウチ	<i>Laccotrephes japonensis</i>		CR	
190	ヘビトンボ	ヤマトクロスジヘビトンボ	<i>Parachauliodes japonicus</i>		NT		
191	ハンミョウ	ナミハンミョウ	<i>Cicindela chinensis japonica</i>		NT		
192	クワガタ	ヒラタクワガタ	<i>Serrognathus platymelus pilifer</i>		NT		
193	コガネムシ	オオチャイロハナムグリ	<i>Osmoderma opicum</i>		NT		
194	タマムシ	クロタマムシ	<i>Buprestis haemorrhoidalis japonensis</i>		NT		
195		ウバタマムシ	<i>Chalcophora japonica japonica</i>		NT		
196		ヤマトタマムシ	<i>Chrysochroa fulgidissima fulgidissima</i>		NT		
197	コメツキ	ウバタマコメツキ	<i>Cryptalaus berus</i>		VU		
198	ホタル	ゲンジボタル	<i>Luciola cruciata</i>		NT		
199		ハイケボタル	<i>Luciola lateralis</i>		VU		
200	ジョウカイボン	キイロジョウカイ	<i>Themus (Haplothemus) nisatoi</i>		NT		
201	カミキリムシ	ベニバハナカミキリ	<i>Paranaspia anaspidoidea</i>		NT		
202		シロスジカミキリ	<i>Batocera lineolata</i>		NT		
203	ハムシ	ハッカハムシ	<i>Chrysolina exanthematica</i>		NT		
204	コマユバチ	ウマノオバチ	<i>Euurobracon yokahamae</i>		NT	NT	
205	アリ	トゲアリ	<i>Polyrhachis lamellidens</i>			VU	
206	セセリチョウ	ミヤマセセリ	<i>Erynnis montana</i>		NT		
207		ギンイチモンジセセリ	<i>Leptalina unicolor</i>		NT	NT	
208		ホソバセセリ	<i>Isoteinon lamprospilus</i>		NT		

209		オオチャバネセセリ	<i>Polytrems pellucida</i>		NT		
210	アゲハチョウ	ミヤマカラスアゲハ	<i>Papilio maackii</i>		NT		
211	シジミチョウ	ゴイシシキミ	<i>Taraka hamada</i>		VU		
212		ウラゴマダラシジミ	<i>Artopoetes pryeri</i>		NT		
213		オオミドリシジミ	<i>Favonius orientalis</i>		NT		
214		コツハメ	<i>Callophrys ferrea</i>		NT		
215	タテハチョウ	オオウラギンスジヒョウモン	<i>Argyronome ruslana</i>		NT		
216		メスグロヒョウモン	<i>Damora sagana</i>		NT		
217		クモガタヒョウモン	<i>Nephargynnis anadyomene</i>		NT		
218		ウラギンヒョウモン(*3)	<i>Fabriciana adippe</i>		(VU)		
219		ミスジチョウ	<i>Neptis philyra</i>		NT		
220		ヒオドシチョウ	<i>Nymphalis xanthomelas</i>		NT		
221		オオムラサキ	<i>Sasakia charonda</i>		NT	NT	
222		ジャノメチョウ	<i>Minois dryas</i>		NT		
223		ヤマキマダラヒカゲ	<i>Neope niphonica</i>		VU		
224	ヤママユガ	シンジュサン	<i>Samia cynthia pryeri</i>		VU		
225		クスサン	<i>Saturnia japonica</i>		NT		
226		ウスタビガ	<i>Rhodinia fugax</i>		NT		
227	イボタガ	イボタガ	<i>Brahmaea japonica</i>		VU		
228	スズメガ	オビグロスズメ	<i>Sphinx crassinirga</i>		VU		
229	コフガ	サラサリンガ	<i>Camptoloma interioratum</i>		EN		
230	ミノガ	オオミノガ	<i>Eumeta variegata</i>		NT		
231	スカシバ	ヒメアトスカシバ	<i>Nokona pernix</i>		NT		
232	クモ類	コガネグモ	キジロオヒキグモ	<i>Arachnura logio</i>		DD(NT)	
233			トゲグモ	<i>Gasteracantha kuhii</i>		DD	
234	貝類	タニシ	マルタニシ	<i>Cipangopaludina chinensis laeta</i>		DD(CR+EN)	VU
235		ベッコウマイマイ	ヒラベッコウ	<i>Bekkochlamys micrograpta</i>		DD	DD

※ ランクの参照

あきる野市版レッドリスト / 東京都レッドリスト（本土部）2020年版西多摩・本土部ランク（西多摩と本土部が異なる場合（）は本土部ランク） / 環境省レッドリスト2020

〈カテゴリー区分と基本概念〉※『東京都レッドデータブック』より抜粋

カテゴリー名称	表示	基本 概念
絶滅危惧Ⅰ類	CR+EN	現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、野生での存在が困難なもの
	CR	ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの
	EN	ⅠA類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの
絶滅危惧Ⅱ類	VU	現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、近い将来「絶滅危惧Ⅰ類」のランクに移行することが確実と考えられるもの

準絶滅危惧	NT	現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」として上位ランクに移行する要素を有するもの
情報不足	DD	環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧の категорияに移行し得る属性を有しているが、生息状況をはじめとして、ランクを判定するに足る情報が得られていないもの

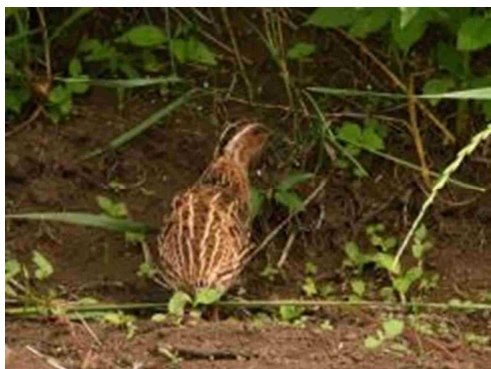
※ 備考

\*1：関東地方を中心に分布するツチガエルは、令和4年8月に発表された研究結果により新種ムカシツチガエル (*Glandirana reliquia*) となりました。

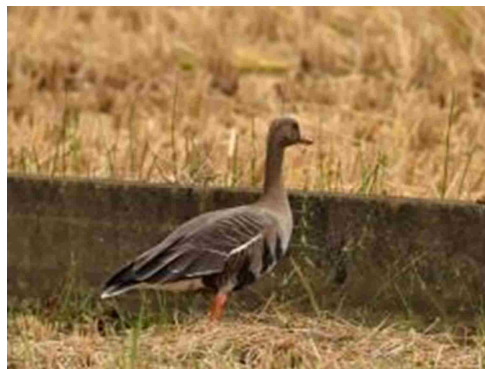
\*2： ヨシノボリ sp. は、トウヨシノボリやクロダハゼとみられる種類を確認済。

\*3： ウラギンヒョウモンは近年の研究により種類は分離し、市内で見られるのはサトウラギンヒョウモン (*Fabriciana pallescens*) と思われませんが、識別は困難とされます。

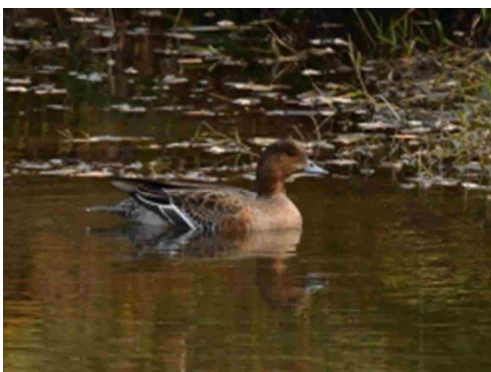
新たに確認した重要な種類の写真（その一部）



ウズラ



マガン



ヒドリガモ



トモエガモ



カンムリカイツブリ



ナベヅル



クイナ



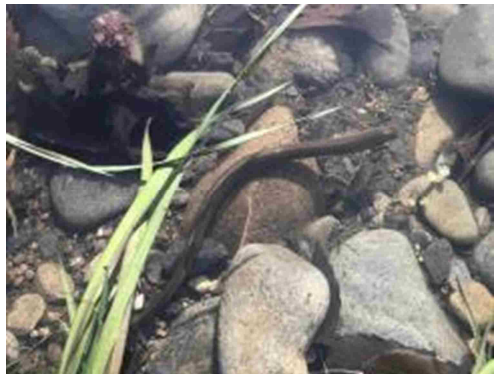
タゲリ



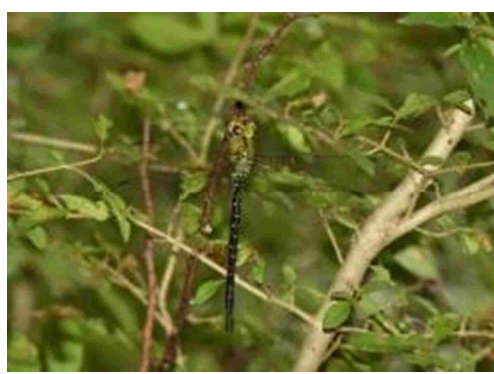
アオアシシギ



ホオアカ



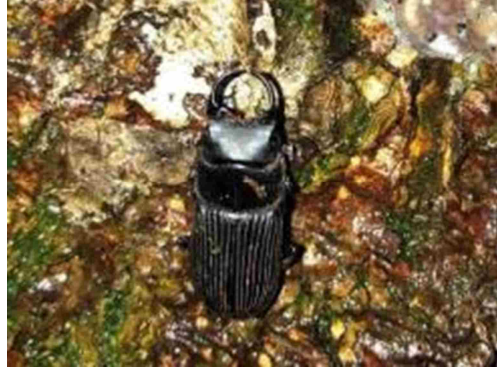
スナヤツメ



カトリヤンマ



マルタンヤンマ



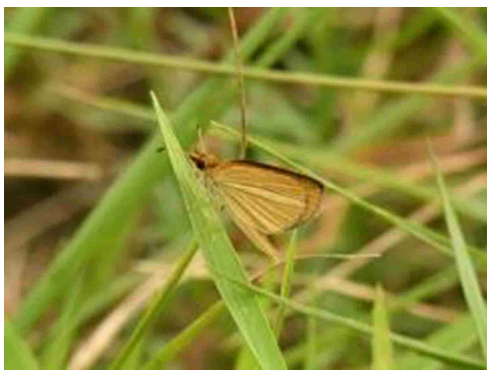
ネプトクワガタ



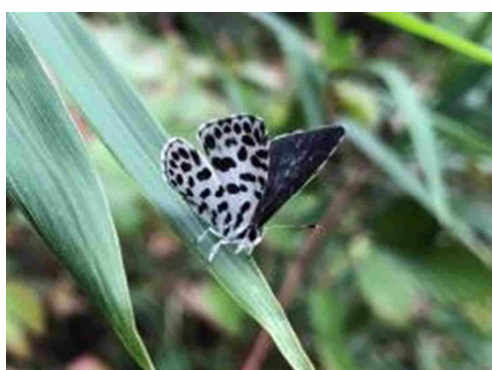
トゲアリ



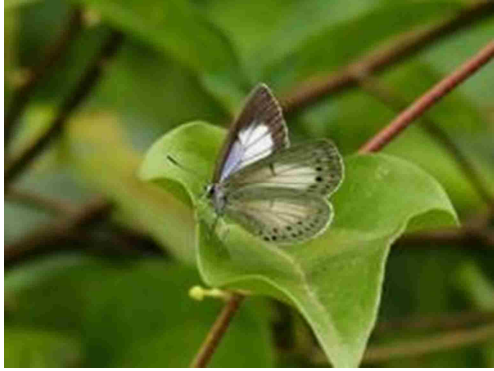
ミヤマチャバネセセリ



ギンイチモンジセセリ



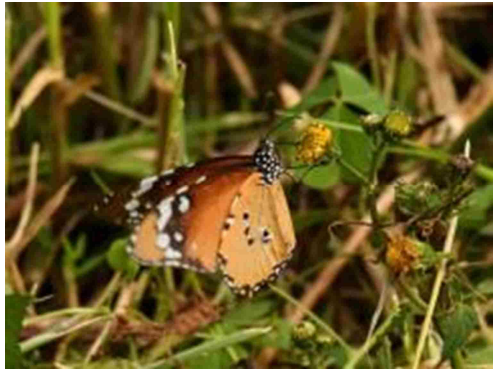
ゴイシジミ



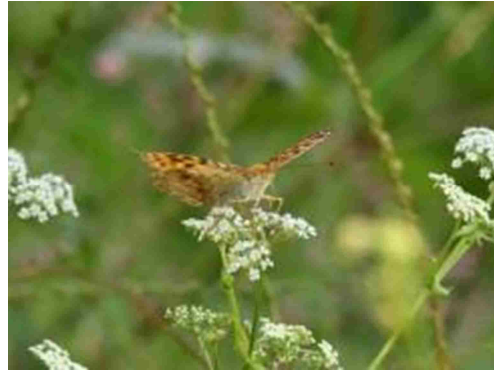
ウラゴマダラシジミ



メスアカミドリシジミ



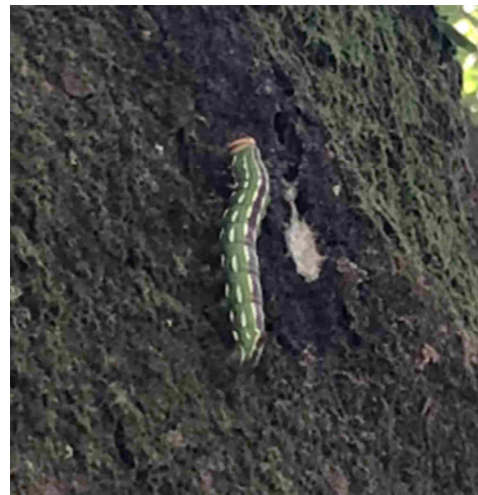
カバマダラ



オオウラギンスジヒョウモン



シンジュサン (幼虫)



オビグロスズメ (幼虫)

## 2 希少種の特別調査（パプロ）

平成23年度から実施してきた希少種の調査により、市内で生息するトウキョウサンショウウオの推移データや、重要猛禽類（クマタカ、オオタカ、サシバ、ハチクマ）の繁殖成功率など、生息状況の最新データ及び希少野鳥の記録について紹介します。

### 2-1 両生類の特別調査（トウキョウサンショウウオ）と両生類保全活動

トウキョウサンショウウオ（*Hynobius tokyoensis*）は、昭和6年に市内で発見された小型サンショウウオで、あきる野市の自然環境の代表的な生き物でもあるため、市のイメージキャラクター（森っこサンちゃん）のモチーフになっています。

トウキョウサンショウウオは、かつて、関東地方に広く分布していましたが、土地利用の変化などの環境悪化により、20世紀後半から生息場所や個体数が激減し、絶滅してしまっ場所もある状況です。現在では、東京都やあきる野市版レッドリストでは絶滅危惧Ⅰ類（EN）に、環境省レッドリスト2020では絶滅危惧Ⅱ類（VU）に指定され、里山の代表的な希少種の一つとなっています。



トウキョウサンショウウオの成体と卵のう

## 2-1-1 トウキョウサンショウウオの調査について

平成23年から実施しているトウキョウサンショウウオの産卵状況や生息状況の調査で、令和3年までに絶滅している場所もありますが、約50か所の産卵場所を確認しています。（一部は情報提供によるデータ収集を実施）

令和3年は、その内41か所で産卵を確認し、卵のう数は、合計1,424個で、例年並みの個数となりましたが、平成31年の2,243個（本調査で確認した最多卵のう数）に比べ、大幅に下回りました。

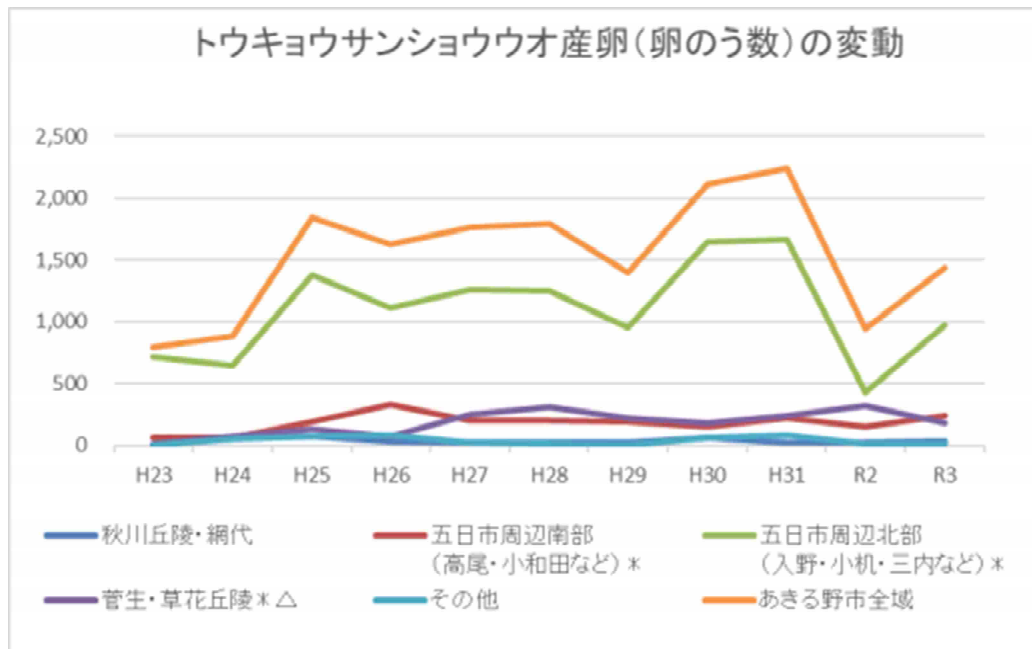
〈トウキョウサンショウウオの産卵（卵のう数）の推移（平成23～令和3年）〉

地区又はエリア	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	H31	R2	R3
秋川丘陵・網代	-	59	78	30	29	25	21	67	27	26	33
五日市周辺南部 (高尾・小和田など)*	64	59	190	333	203	202	195	151	223	155	243
五日市周辺北部 (入野・小机・三内など)*	720	645	1,379	1,109	1,261	1,247	955	1,647	1,668	428	969
菅生・草花丘陵*△	16	75	132	77	249	311	225	181	246	321	181
その他	-	51	69	80	22	10	8	64	79	17	10
あきる野市全域	800	889	1,848	1,629	1,764	1,795	1,404	2,110	2,243	947	1,436

\* 保全が行われている主な地区又はエリア

△産卵場所の減少が目立つ地区又はエリア

赤字: 内部調査、または情報不足の年



この11年間の状況を見ると、産卵場所となる水場の整備や外来種対策などの保全活動が行われている場所では、個体数はある程度安定し、卵のう数が増加している場所もありますが、それ以外の場所では個体数の減少が目立っています。

表で示しているように、平成30年、平成31年の卵のう数は最も多く、トウキョウサンショウウオの生息状況の回復のピークとなっています。これは、産卵場所の保全やアライグマなどの外来種対策の成果が広い範囲で現れていると思われましたが、その後は再び減少しました。理由としては、絶滅させることができなかったアライグマなどのリバウンドや、サンショウウオの人による採集問題の影響、さらには、里山の放置や、産卵場所の乾燥化が続いていることが考えられます。

令和3年の春の調査でも、トウキョウサンショウウオの成体及び卵のうの外来種による食害や人による採集被害は、少なくとも15か所確認しており、全産卵場所の3割以上で被害があると疑われる事態を確認しました。

また、令和2年は、新型コロナウイルスの影響による調査不足、冬～春にかけての雨不足も卵のう数の減少を示す結果の要因と考えています。

このように様々な要因が混在する中、特に、菅生草花丘陵周辺や、秋川南部の分布域内の個体群は、深刻な生息状況にあるため、これまで以上の保全活動が必要となっています。



トウキョウサンショウウオを捕食するアライグマの様子



環境が悪化した産卵場所の様子

※謝辞：トウキョウサンショウウオ研究会、西多摩自然フォーラム、小峰ビジターセンター、西秋川衛生組合や多くの市民の方々のご理解とご協力により、情報が寄せられるとともに保全活動も進められています。

## 2-1-2 両生類などの保全活動について（環境保全と外来種対策）

森林レンジャーあきる野は、希少種や生態系の保全のため、様々な保全活動を行っていますが、自然保護に向けて最も重要とされるのは、自然に対する理解や、関心を深め

ることです。そのため、市広報や森林レンジャーあきる野新聞などを活用し、自然に関する情報を発信するとともに、環境教育として市内外の方に向けた講演会や市内小学校体験学習、イベントでの自然解説などを行っています。（詳しくは「Ⅲ 環境教育事業」参照）

また、トウキョウサンショウウオをはじめとした両生類や水生生物のためのピオトープ（池）作りと生息環境の整備を適切な時期に実施することにより、様々な種類の生き物を存続させることができています。

さらに、生態系に大変な被害をもたらしているアライグマなどの外来種の捕獲や駆除活動も継続して行い、その被害を減らしています。

以下は保全活動の様子。



外来種捕獲の様子（アライグマ）



市民との協働による  
両生類などの産卵場所整備



爬虫類・両生類などの生き物の  
ロードキル防止看板の設置



産卵場所の監視や産卵などの保護（水場が干上がった場所からの移植や産卵場でのアライグマ避けの支障物投入など）

森林レンジャーあきる野新聞による情報発信

**Shirane RANGER** 森林レンジャーあきる野新聞  
Vol.131 2021年5月号  
発行：森林レンジャーあきる野（パブロ）

**トウキョウサンショウウオ調査10周年記念**  
レンジャー活動で、トウキョウサンショウウオの生息状況調査や保全活動に2回  
り10年が経ちました。私にとって、可愛らしいサンショウウオの仲間と出会って、  
トウキョウサンショウウオはあきる野を訪れるようになったきっかけでもあります。  
しかし、その保全を進めながら、弊害ではなかったことがわかりました。一方、生息  
状況の向上に繋がった場面もあり、喜ばれたことと実感しました。



**あきる野のサンちゃん** トウキョウサンショウウオは、多西村（現在のあきる野市）で初めて採取された個  
体により命名されました。関東地方にのみ分布する小型サンショウウオで、土地利用の変化や開発などにより生  
息場所や個体数は激減しています。  
しかし、あきる野は東京都の中で最も多く個体群が残るエリアの一つであり、里山環境の代表的な生き物となっ  
ています。これらの理由で、あきる野のイメージキャラクター「森っ子サンちゃん」が誕生しました（タイトルの右側イ  
ラスト）。春は産卵の時期で、水場に集まる数多くのトウキョウサンショウウオを観ることもできます（上写  
真、トウキョウサンショウウオとその卵のう）。

**トウキョウサンショウウオの生息状況** 毎年、トウキョウサンショウウオの生息状況を把握するため、  
市内の産卵状況の確認を行っています。東京都周辺での絶滅が特に心配されていますが、近年は回復の傾向  
にあるエリアもみられます。都内に生息する個体のうち約1/3が市内に生息しているとみられ、森林レンジャーの  
ほか、ボランティアで活動されている西多摩自然フォーラムや、各地区の市民団体などの保全活動により、成果が表  
れているといえます。

その中、2020年は新型コロナウイルス感染症の影響による情報不足、2021年は冬～春の厳しい平ばつ  
の影響により、ここ2年の産卵と再び減少しました。他にも、外来種やマニアによる採取の被害は防止しがちな  
状況で、継続的な被害が目立つ場所がみられています。

産卵地又は産卵	1970年	1975年	1980年	1985年	1990年	1995年	2000年	2005年	2010年	2015年	2020年
真田山 産卵	50	70	20	23	21	87	27	26	32		
真田山 産卵場	64	58	180	333	293	202	195	151	223	155	243
（風量・小沢谷など）*											
真田山 産卵場	720	645	1,370	1,100	1,261	1,247	955	1,647	1,668	428	669
（人形・小沢・三ツ谷など）*											
東京・東京都内	16	70	1,372	771	248	311	225	181	248	292	160
その他	-	51	69	80	22	53	8	64	79	17	15
あきる野市全域	806	882	1,848	1,829	1,799	1,494	2,112	2,242	3,120	1,120	1,484

\*調査が行われている主な産卵地又は産卵場。産卵場別の産卵数が集計されたエリア。\*中 産卵調査、および産卵場別の平均値  
※産卵場別の産卵数は、産卵場別の産卵数から算出されています。\*注：この表は、あきる野市全域の産卵数とあきる野市全域の産卵場別の産卵数を示しています。\*注：この表は、あきる野市全域の産卵数とあきる野市全域の産卵場別の産卵数を示しています。



**環境の重要性** トウキョウサンショウウオは標高の低い丘陵地帯の谷津田や湧水地などの周辺に生息します。水場周辺に隠れ場となる森林や林が存在する豊かな自然環境を、産卵場所として必要とします。コナラなどの雑木林は理想的な場所と見入るため、このような環境の保全は重要だと考えています。



**サンちゃんの特長** トウキョウサンショウウオが生息する場所には、他の両生類や水生生物も生息しています。生態系においてこれらの生き物は重要な役割を果たします。特に春は、このような生き物を餌として必要とする消費者が多いため、産卵する水場環境の保全が生き物多様性の向上に繋がります。（写真：カエルを運ぶサンちゃん）



**外來種とのやり取り** 主に住宅街や河川から低山地帯を中心に、自然に大きなダメージを与えている外来種がたくさん生息しています。排水槽グラムのアメリカザリガニの子どもから、約10キロにもなるアライグマの成獣と幅広く、夜来種を捕獲させてしまう存在になります。動物の売買は簡単にできるグローバルな世界の流通に、駆逐しきれない外来種の多さにより対策の困難さをよく実感しています。管理されている産卵場所でも裏にアライグマやハクビシンの捕獲数はこれまで70倍も増えています。そして、産卵場でも1000個以上が捕獲されましたが、またまた増えています。

（写真）アライグマによる産卵場所の被害をセンサーカメラや監視でよく確認している。あきる野市、動きが鈍く、歩調にのみがみられる個体を見ました。捕獲してから逃げた個体でしょうか……。このサンショウウオは、恐ろしく生きられなかったと思われます。

**やはり、水場が一番重要！** 外来種問題やマニアなどによる採取問題が目立つ時代になった上、土地利用の変化による環境消失は最も重大な問題です。トウキョウサンショウウオの産卵できる場所が大幅に減ってきた以上、トウキョウサンショウウオを存続させるために産卵場所を数個し、復活させています。湧き水などがあつた場所の周辺を掘ると、腐土のように水が再び湧き、数年以内にトウキョウサンショウウオなどの両生類や水生生物が戻ってきます。この様に、小さな湧き水や井戸などを守り続けられれば、簡単にトウキョウサンショウウオなどが存続できると思います。

（右写真）市民の方と協働で掘った池の様子。管理が大変な時もありますが、毎年この場所から生まれる新たな小さな命は数えきれないほどです（右下に小さく、エビを食べるトウキョウサンショウウオの幼生）。



○ アライグマ・ハクビシン捕獲活動（外来種対策の最新状況）

行政による外来種対策の一環として、平成25年から両生類などの重要な生息場所となる水辺環境などでアライグマやハクビシンなどの捕獲活動を実施しています（生態系保全活動による捕獲）

特にアライグマは、水辺環境の生き物から山中の樹上に棲む野鳥などまで、多くの生物に大きな影響を与え、絶滅させてしまうことが報告されています。そのため、アライグマを中心に、ハクビシンやアメリカザリガニ、アカミミガメ、ウシガエル、ガビチョウ、クビアカツヤカミキリ、オオバタクサなど様々な外来種の捕獲や駆除を行っています。

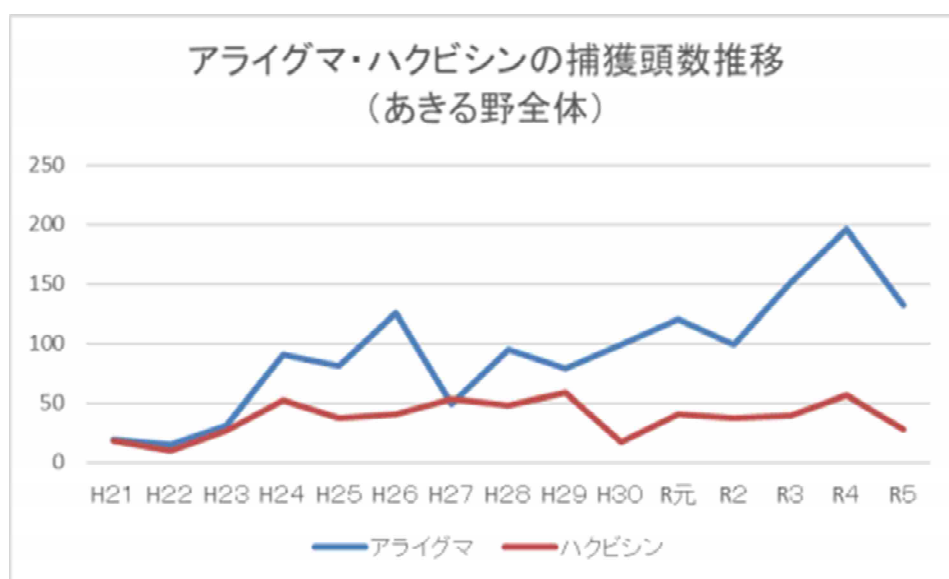
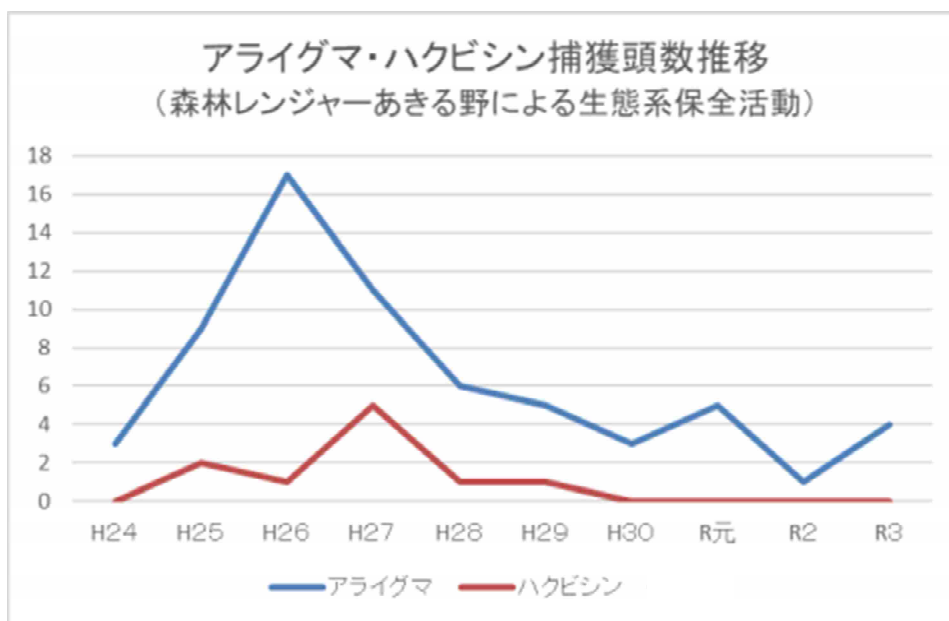
外来種の捕獲や駆除をすることは、残酷であるという声もありますが、現代の自然保護のために欠かせない活動であると確信しています。

〈アライグマ・ハクビシンの捕獲頭数（森林レンジャーあきる野による生態系保全活動のみ）〉

年度	アライグマ（頭）			ハクビシン（頭）		
	オス	メス	不明	オス	メス	不明
平成24	1	1	1	—	—	—
平成25	3	3	3	—	—	2
平成26	15	2	—	—	1	—
平成27	10	1	—	3	2	—
平成28	4	2	—	1	—	—
平成29	5	—	—	1	—	—
平成30	3	—	—	—	—	—
令和元	4	1	—	—	—	—
令和2	1	—	—	—	—	—
令和3	4	—	—	—	—	—
小計	50	10	4	5	3	2
合計	64			10		

アライグマ及びハクビシンの捕獲頭数のピークは、平成26年前後とみられます。平成27年からは捕獲頭数が減少しはじめ、令和に入ると捕獲数は特に減少しています。

これは、平成25年からの外来種対策による捕獲と平成28年から実施されている農業被害対策による捕獲頭数が大幅に増加したことによる成果と思われる。また、生存している個体の学習能力の向上、餌に不自由しない市街地や農地などに生息分布を転換していることも考えられます。



生態系の保全を目的として捕獲したアライグマやハクビシンの頭数は、あきる野市全体で捕獲されている頭数の4%程度となっています。

あきる野市では、他に農業、民家の被害対策のための捕獲を実施しており、捕獲頭数は、生態系での捕獲より圧倒的に多く、獣害対策に大きな成果を上げられると思われませんが、センサーカメラや痕跡によると市街地や農地では、生息密度が高まっている可能性があります。

市街地では、アライグマやハクビシンの外来種は、空き家などを住処にしている場合が多いため、市街地での外来種対策は、このような課題を解決する必要があると思われま

## 2-2 重要猛禽類調査

### ○ 重要猛禽類の繁殖状況について

アンブレラ種（生息する地域の自然生態系における食物連鎖の頂点の消費者）である猛禽類の重要な種類（クマタカ、ハチクマ、サシバ、オオタカ）は、地域の生態系の保全に重要な役割を持つ存在であるため、引き続き生息状況調査を行うとともに、保全活動を行っています。

本報告書では、前回の報告書を更新し、この11年間の繁殖状況及び繁殖成功率の詳細（繁殖成功巣数や個体の巣立ち数）についてまとめました。



クマタカ (*Nisaetus nipalensis*)



ハチクマ (*Pernis ptilorhynchus*)



サシバ (*Butastur indicus*)



オオタカ (*Accipiter gentilis*)

4種類の繁殖成功率の間に格差が目立ってきました。特に、オオタカやサシバのつがいの数の減少や、繁殖成功率の低下が見られます。なお、あきる野市で最後のサシバのつがいが令和元年以降、繁殖に成功せず、令和3年には、飛来を確認することがなくなりました。これら2種類の存続は、非常に危惧される状況にあります。

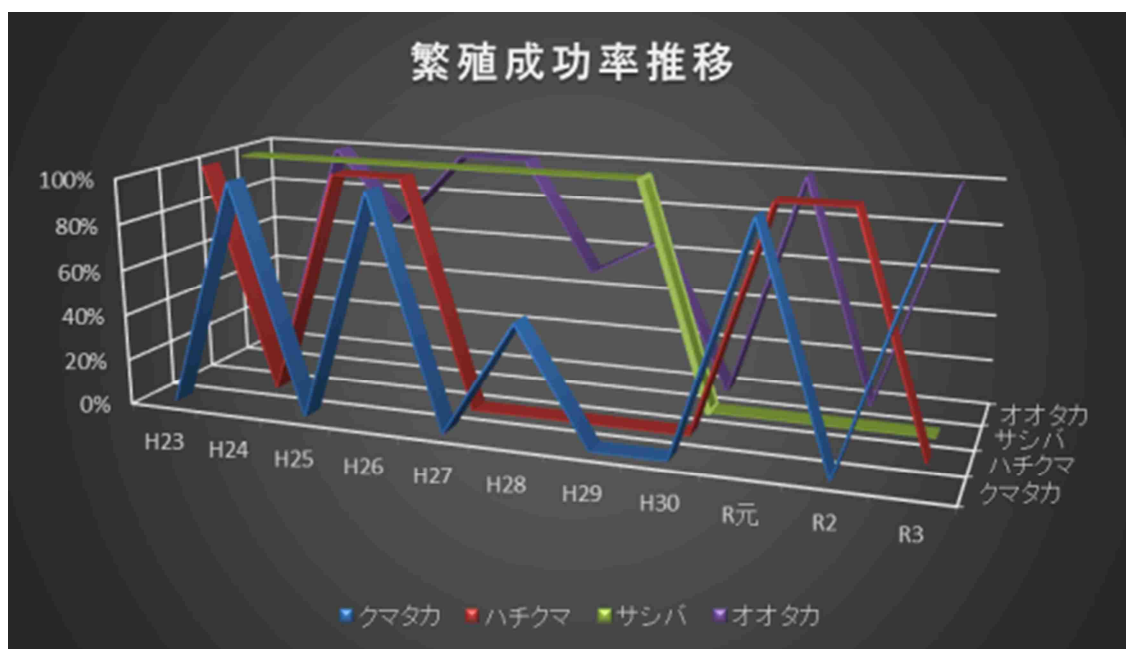
クマタカは、市内で継続的に営巣する唯一のつがいが令和元年に営巣場所を変えた後に安定した状況に戻り、調査期間の全体を通して高い繁殖成功率を示しますが、あきる野市周辺の市外で営巣する他のつがいが繁殖に成功する例は少ないように見受けられます。さらに、繁殖に向けて市内でテリトリーを持つ他のつがいは、残念ながら営巣放棄などの例を数回確認しています。

ハチクマは、個体の入れ替わりなどにより、市内で再び繁殖が成功する年が見られますが、あきる野市における飛来率は、低い傾向とされます。

〈あきる野市における重要猛禽類の繁殖成功率推移（繁殖成功巣数／造巣・産卵巣数）〉

種類	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R元	R2	R3	平均
クマタカ	—	100%	—	100%	0%	50%	—	0%	100%	—	100%	69%
ハチクマ	100%	—	100%	100%	—	—	0%	—	100%	100%	—	83%
サシバ	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	0%	0%	0%	—	70%
オオタカ	ND	100%	67%	100%	100%	50%	67%	0%	100%	0%	100%	68%

※ クマタカは2年置きに繁殖する / 赤字は確定できなかったデータのため、推定数字 / NDは調査なしやデータ不足



繁殖成功率は、市内で造巣又は産卵（放卵）から雛が巣立ちした時点まで及び確認したつがいの数により算出しました。今回の報告書では、一部の猛禽類でしか得られていない造巣の段階のデータが含まれています。前回の実績報告書の結果とは異なる部分が出ていますが、近年の3年間分の情報も含めているため、より詳細な繁殖成功率に至っ

ています。

結果、11年間の全種の繁殖成功率の平均は、60%以上を示しており、最高でハチクマの83%、最低でクマタカの64%、やや高い～高い成功率を評価することができます。しかし、近年は繁殖成功率が低下しており、つがいの数、繁殖成功巣の数や巣立ちする個体数は減少してきたことが分かります。

〈市内の巣の状況（繁殖成功巣数）〉

繁殖成功巣数(放卵巣/巣立ち巣)											
種類(つがい)	H23	H24年	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R元	R2	R3
クマタカ1	—	1	—	1	—	1	—	X*	1	—	1
クマタカ2	—	—	X	—	X*	X*	—	—	—	—	—
クマタカ3	—	—	—	—	—	—	—	—	X	X	—
クマタカ合計	0	1	0	1	0	1	0	0	1	0	1
ハチクマ1	ND	—	1	1	X	—	—	—	1	1	—
ハチクマ2	1	—	—	—	—	—	0	—	—	—	—
ハチクマ合計	1	0	1	1	0	0	0	0	1	1	0
サシバ1	1?	1	1	1	1	1	1	0	0	0	—
サシバ2	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
サシバ合計	2?	2	1	1	1	1	1	0	0	0	0
オオタカ1	ND	1	0	—	—	—	0	—	—	—	—
オオタカ2	ND	ND	1	1	1	1	1	0	1	0	1
オオタカ3	ND	ND	1?	1	1	0	1	0	1	X	—
オオタカ4	ND	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
オオタカ合計	ND	1	2?	2	2	1	2	0	2	0	1

※ 1（雛の巣立ちあり）、0（産卵はあったが、繁殖失敗）、X（飛来/ペアリングは確認したが、産卵なし（\*その内、造巣確定））、—（不在/飛来なし（又は市外））、ND（調査/データなし）

〈市内の雛の巣立ち状況（巣立ち数）〉

雛の巣立ち状況											
種類(つがい)	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R元	R2	R3
クマタカ1	—	1	—	1	—	1	—	X	1	—	1
クマタカ2	—	—	X	—	X	X	—	—	—	—	—
クマタカ3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
クマタカ合計	0	1	0	1	0	1	0	0	1	0	1
ハチクマ1	ND	—	1	不明	X	—	—	—	1	1	—
ハチクマ2	2	—	—	—	—	—	0	—	—	—	—
ハチクマ合計	2	0	1	1～?	0	0	0	0	1	1	0
サシバ1	ND	不明	1	不明	2	1	2?	0	0	0	—
サシバ2	2?	1?	—	—	—	—	—	—	—	—	—
サシバ合計	2?	1～?	1	1～?	2	1	2?	0	0	0	0
オオタカ1	ND	不明	0	—	—	—	0	—	—	—	—
オオタカ2	ND	ND	不明	不明	3	3	1	0	1	0	1
オオタカ3	ND	ND	1?	4	1?	0	1	0	2	X	—
オオタカ4	ND	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
オオタカ合計	ND	1～?	1～?	5～?	4?	3	2	0	3	0	1

※ クマタカの放卵数は一つ、他の種類は複数

市内で確認した猛禽類の繁殖活動や繁殖成功率の低下の原因をまとめてみました。

まずはこれまでに確認した重要な例です。

- 平成27年・29年【ハチクマ】：  
頻繁に起きるゲリラ豪雨などが繁殖失敗の主な要因だったと思われます。その後の周辺の山林伐採や間伐の影響もあり、そのつがいはあきる野市周辺に飛来しなくなりました。
- 平成30年・令和元年【サシバ】：  
雛が巣内で哺乳類に襲われ捕食されたとみられます。
- 平成30年【クマタカ】：  
巣の落下により、繁殖活動が中断しました。
- 令和元年・2年【クマタカ】：  
外部の観察（又は調査）の影響により、放卵前後で繁殖活動が中断したと思われます。
- 令和2年・3年【オオタカ】：  
森林整備の実施により、繁殖を開始する頃に営巣場所を放棄しました。

上記の例とその他の要因を合わせると次の主な原因が認められます。

- 営巣林や重要な行動圏内の環境変化（ハチクマ2例、クマタカ1～2例、オオタカ3例）
- 異常気象（ハチクマ2例）
- 哺乳類（アライグマなどの外来種の可能性を含む）による捕食（サシバ2例）
- その他の自然原因：  
巣の落下や、未成熟などと疑われる事態（クマタカ1～2例）
- その他的人為的原因：  
ヘリコプターの訓練などと思われる影響（少なくともクマタカ1例）
- 原因不明の繁殖失敗（オオタカ3例）

このように、約半数は、人間の活動が関係しているため、繁殖成功率へ的人為的な影響は大きいと言えます。

また、原因不明の中には、カメラマンやハイキング、アウトドアスポーツなどの影響が疑われる例もあるため、人間が与えている影響は、更に大きいと思われます。

以上の結果や現状を踏まえ、重要な猛禽類のつがいの生息状況を、今回はチェックリストによる評価で行うことにしました。評価項目は、①つがいの減少、②繁殖成功率の低下、③巣立ち個体数の減少、④営巣場所の問題、⑤今後の営巣の見込、という5つの項目のあり（1点）なし（0点）により、最大5点となる各種のつがいの消滅の危機を示す単純な評価モデルです。

〈重要猛禽類各種の生息状況の評価〉

種類	つがいの減少あり	繁殖成功率の低下あり	巣立ち個体数の減少あり	営巣場所の問題あり	今後の営巣見込めない	合計※
クマタカ	1	0	0	1	0	2
ハチクマ	1	0	1	1	0	3
サシバ	1	1	1	1	1	5
オオタカ	1	1	1	1	0	4

※合計：0（最も安定な生息状況）～5（最も不安定な生息状況）

この評価により、上記で示したように、サシバ（5点）やオオタカ（4点）は危機的状況で、市で繁殖するつがいの消滅の危機を示します。

一方、クマタカ（2点）とハチクマ（3点）は、比較的安定した生息状況とみられますが、決して安心できる状況ではないと考えられます。

猛禽類の生息や繁殖に影響を及ぼす要因は多いため、全てを改善するのは難しい状況ではありますが、健全な自然生態系の状態であれば安定的に繁殖率・成功率が確実に高まると言えるため、自然環境の向上を目指す必要があると思われます。

また、自然のバランスと大きく関わっている猛禽類の保全強化を図るため、行政や林業関係者などと連携体制をより強化することが大変重要であると考えています。

今後も、本調査の継続や猛禽類の保全のために活動し、環境教育や情報発信なども通じて猛禽類に対する理解を高める効果を期待しています。



#### 【追われるオオタカ】

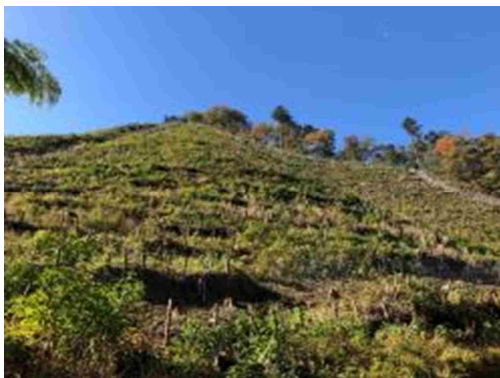
餌運び中、カラスの攻撃を受けるオオタカの様子。人間活動からも様々な圧力がかかる猛禽類は、更に敵が多いと言えます。



#### 【あきる野市で最後のサシバ】

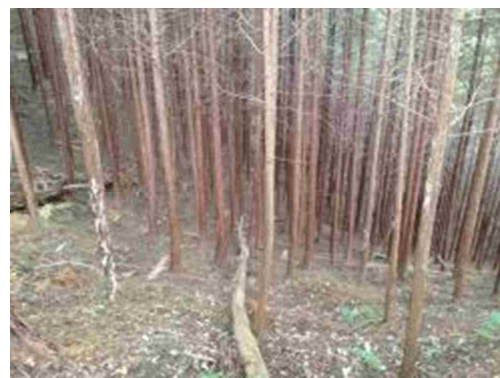
近年、個体数が激減しているため、西多摩エリアでは、つがいが消滅するおそれがあり、あきる野市では既に飛来するつがいは見られなくなりました。

狩場にする草地や水田などの減少や悪化により、獲物の捕獲成功率は低下し、生息しにくくなっています。



#### 【森林の再生】

森林整備は、生物多様性の発展に欠かせない事業です。森林の再生により、多くの生物が利用する環境に生まれ変わります。一方、植林などの間伐や伐採事業は、猛禽類などの営巣場所に配慮しながら、計画的にバランス良く実施することが求められます。



#### 【住処なしの植林】

市の広い範囲で見られる密集したスギやヒノキなどの植林地は、多くの猛禽類の生息にあまり適さないだけでなく、限られた生き物しか見られない程の生物多様性の貧弱の要因でもあるため、適切な森林環境への改善を望みます。

森林レンジャーあきる野新聞による情報発信

### Shirane RANGER

## 森林レンジャーあきる野新聞

あきる野のタカ  
Vol.134 2023年8月  
発行:森林レンジャーあきる野 (65/10)

あきる野の自然の恵みは、山、谷、川の環境が近い範囲で存在していることではないかと思えます。これらの環境はどれも大切で、存続には人間の行いが大きく左右してまいります。

様々な環境が揃っているおかげで、自然にはいて、大変貴重な資源です。オウソウなどの猛禽類も、市内では数多く確認できます。時には狩りを行い、時には繁殖のために営巣するものもいます。

日本の自然の未来に繋がるように、猛禽類と向き合い、守る必要があることを知っていただくため、ここでみなさんにあきる野のタカを紹介いたします。

### 安全にして行く鳥獣被害対策

#### クマタカ



自然系では欠かせない肉食者で、市内で数多く見られる猛禽です。クマタカは、タカの中でも最も大きく、オウソウよりも大きいです。クマタカは、自然系から森林に生息し、基本的に遠くで目にする機会は少ないと思えますが、山の頂上などで群れに集まっていると、たまたまお目にかかることがあります。

#### サシバ



富士山の王子のさよなら？ サシバは富士山麓のシンボルです。これまでモニタリングしたついでには毎年繁殖していましたが、3年前から繁殖が失われ続け、数が激減してしまいましたが、様々な影響があったことを確認しました。ついに今年もサシバのついでが飛来しなくなりました。

現状の自然環境の悪化を改善するパートナーであるサシバの保全のため、富士山麓の自然系、農業への支援など、様々な形での対策が必要と考えています。

#### トビ



トビはあきる野において最も普通で、繁殖のついでが確認されます。1年中、特に河川敷などの繁殖地などでよく見られる鳥が知られます。

#### ノスリ



ノスリは市内の広い範囲で見られます。ターゲットとする獲物は幅広く、あまり環境にこだわっている印象はありませんが、見過しのおもむけで多く見られます。

### タカの大イベントは、これからの秋の渡り

秋の渡りがスタートする頃です。越冬地を目指して南下するサシバ、ハタチ、ノスリなどの猛禽類がこの地域を渡ります。11月中旬から10月上旬までがピークですが、種類によっては8月中旬の早い段階で渡り始めるものや、11月に渡り始めるものもいます。多くの鳥が、1日の渡りだけで数百キロを飛んでくるものもいます。双葉渡りと呼ばれる、越冬地を目指すのは秋の渡りです。

#### ハチタカ



市内においては、早稲田から繁殖の情報があふれていますが、レンジャーの調査で2011年に市内での繁殖を確認しました。その後、あきる野市などの西多摩エリアで繁殖するついでを確認しています。この地域では、個体数が非常に少ない上、森林性の傾向が強いために調査しにくい猛禽類です。ハチの巣を築くハンターである以上、人間にとってほとんど見えない存在であるに違いありません。

#### ハイタカ



前種は小型で、特に市内で繁殖するついでにはハイタカの大きいため、見られることは少ないですが、河川敷や市内の緑地一帯山まで広く生息しています。小さく美しく、小鳥などを狙う瞬間は物陰でも見ることがしばしばあります。

#### ミサゴ



年によって、主に秋の間に少数があきる野の市内に渡り来ます。あきる野のハンターで、人間によって「好き嫌い」が分かれるかも知れませんが、狩りをする鳥はゾウガシラで大量繁殖的ですので、

#### サシバの「渡り」



富士山の「渡り」 富士山のタカが群れて上層気流に乗って渡る鳥の渡りです。渡りをする鳥は、個体数が多いほど渡りが早い。近くで見ることができれば、言葉にできないくらい素晴らしい瞬間だと思います。

#### たまたま、見物



過去に1度だけ、この地域では珍しいアホウドツバメが平野の山麓に飛来しました。まさにオウソウなどの鳥も市内に飛来したとの情報が寄せられています。

## 2-3 希少野鳥の調査

夏鳥のミゾゴイやサンコウチョウの生息状況の最新状況の推移とともに、今回は新たに、市内で確認したその他の森林性の希少野鳥の確認記録について報告します。

### 2-3-1 ミゾゴイの生息状況について



ミゾゴイ (*Gorsachius goisagi*) は、個体数が極めて少ないとされる夏鳥で、種の基本繁殖エリアは日本に限られているとも言われています。この調査で確認したものや毎年寄せられた情報提供により、飛来状況などが確認されています。

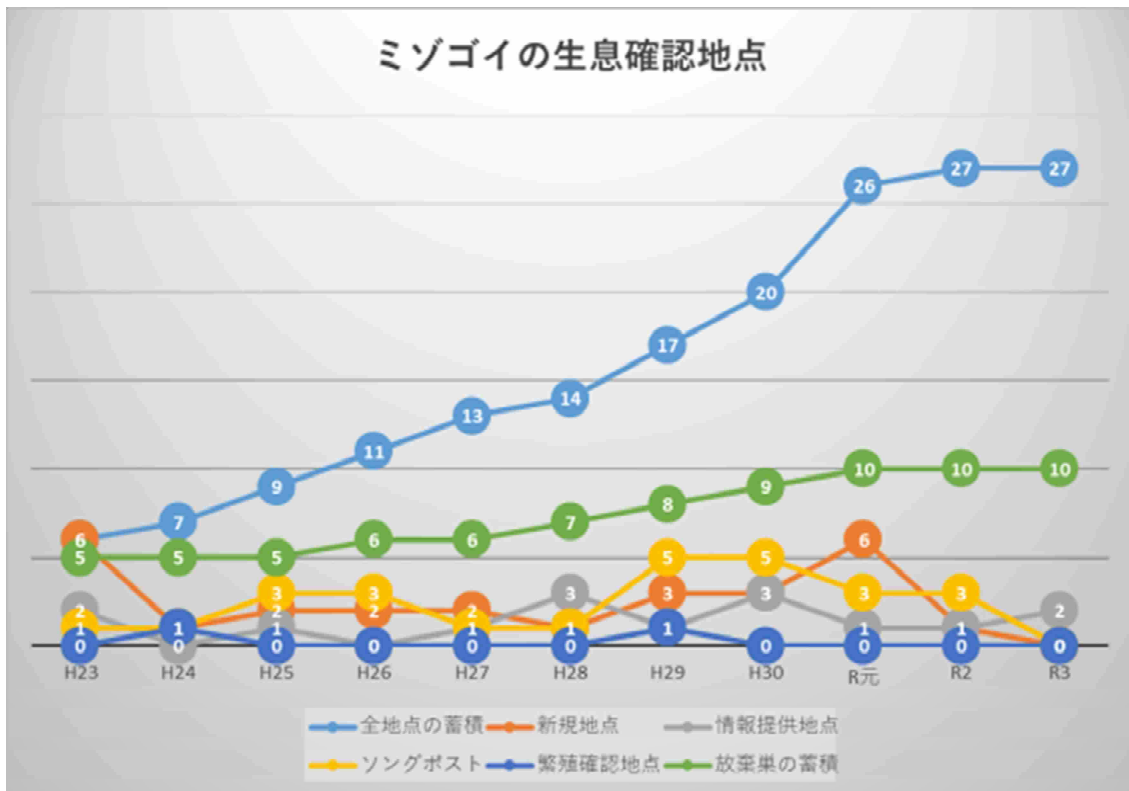
これまでに、市内でミゾゴイを27地点で確認しましたが、近年は、放棄巣の増加や、ソングポスト（繁殖に向けて鳴く場所）の減少が見られます。また、新たな繁殖場所の情報も得られなくなってきています。

このため、ミゾゴイの生息密度は不明確ですが、市内に飛来するミゾゴイの個体数、繁殖数も減少していると考えられ、生息密度は極めて低いと思われます。

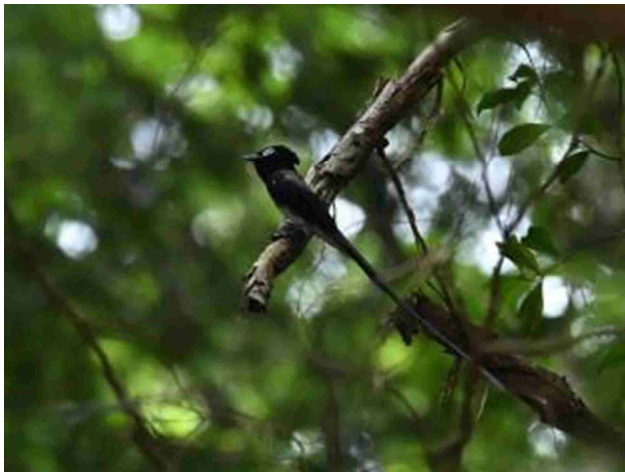
生息密度の低下の要因は、生息環境の悪化や減少、外来種の影響や飛来する個体の減少が考えられます。

今後は、数少ない繁殖場所の特定とその周辺の保全を行うことが望ましいため、森林整備や林内の工事を行う場合は、計画的で、自然に配慮した方法で実施することが求められます。

以下はミゾゴイの確認地点を示す表です。



## 2-3-2 サンコウチョウの確認状況について



サンコウチョウ (*Tersiphone atrocaudata*) は、希少で魅力的な夏鳥です。毎年、複数のエリアで飛来を確認し、飛来場所や繁殖の確認を記録しています。

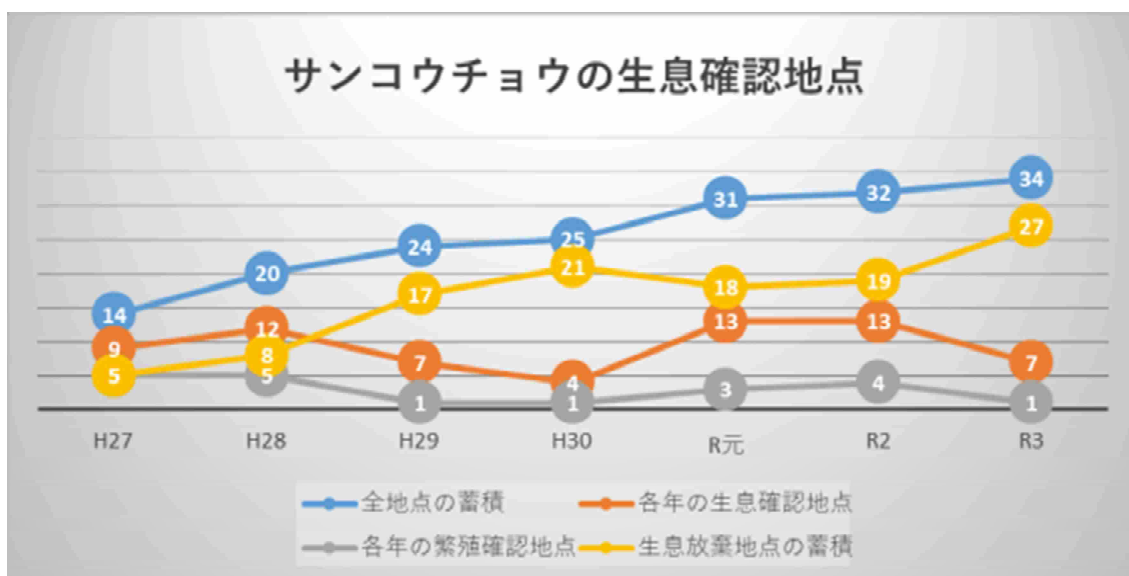
これまでに確認した生息地点は、少しずつ増えていますが、各年の生息確認地点は、最少で4地点、最多で13地点と変動しています。

生息放棄地点が目立つ年も見受けられますが、個体数の増減というより、自然環境の変化が現れていると思われます。また、確実に繁殖する地点や成功する営巣場所の確認ができているのはほんの一部で、現時点での繁殖成功率などの詳細は得られていません。

しかし、得られたデータから、各年の飛来個体数の変動や生息場所の自然環境の変化がある中でも、ある程度安定して生息していると思われます。

引き続き、このような情報を蓄積していくことにより、より詳細な生息状況について分析できるのではないかと考えています。

以下は、その推移を示す表です。



### 2-3-3 その他森林性などの希少野鳥の確認記録

サンコウチョウやミゾゴイ以外に平成22年以降、森林レンジャー活動の中で確認できた森林性の希少野鳥について報告します。

冬鳥、夏鳥などに関わらず、以前からある程度の滞在が認められる16種類の鳥類の記録をまとめました。

これらの種を目的に調査を行ってきたわけではなく、他の生き物の調査中などで確認したもののまとめになりますが、12年間で市全体を満遍なく巡視した結果でもあるため、ある程度の指標となるデータであると考えています。

かつて、秋川渓谷の人気種類のアカショウビン、ヤマセミやブッポウソウ、さらには早春の印象的なレンジャクの仲間、そして山岳地帯の代表的な夏鳥であるコマドリ、コルリやエゾムシクイの生息・飛来状況に変化が見られたため、12年間の傾向や話題について提供したいと思います。

このような記録は、今後のレッドリストなどの検討や将来の資料に役立つ材料になると考えています。

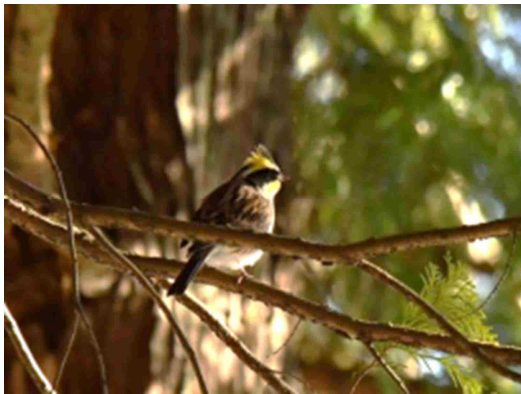
以下は、市内の16種の希少野鳥の確認結果です。

希少野鳥の各年確認回数（又は回数による個体数）												
希少野鳥一覧 （あきる野RLランク）	2010年 (H22)	2011年 (H23)	2012年 (H24)	2013年 (H25)	2014年 (H26)	2015年 (H27)	2016年 (H28)	2017年 (H29)	2018年 (H30)	2019年 (R元)	2020年 (R2)	2021年 (R3)
ジュウイチ (VU)	2				1	1	4	2	1		1	2
ヤマシギ (CR)		2	1			2		1	1	1*	6*	1
コノハズク (CR)	1										1	
アカショウビン (CR)		1								△		△
ヤマセミ (CR)				1 & △		2	1				1	
ブッポウソウ (CR)					1							
ヤイロチョウ (DD)												
サンショウクイ (CR)								1	1	4	4	17
リュウキョウ サンショウクイ (DD)								1		3	3	16
クイタダキ (VU)	1	2	5	11			1	2	1	2		2
エゾムシクイ (CR)	2	1		1	1		1					
キレンジャク						1(多)					1(多)	
ヒレンジャク					4(多)	1(多)						
コマドリ (VU)			1				3	1		1		
コルリ (CR)	2											
ベニマシコ (NT)	1	3	1	1 ?	1 ?	3	4	8	2	5	3	3
ミヤマホオジロ (VU)						1		4	1			1

赤は明らかに減少した種、緑は増加した種、黒は増減が不明確な種。

備考：\*センサーカメラによる確認 / △：情報提供

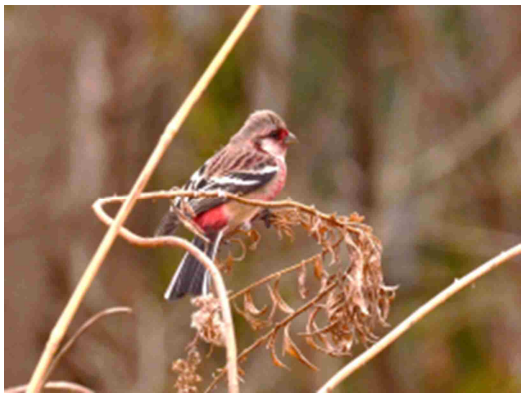
（平成22年については、調査不足とされます）



ミヤマホオジロ



サンショウクイ



ベニマシコ



ヒレンジャク

各種の詳細は以下のとおりです。

#### ジュウイチ (*Hierococcyx hyperythrus*)

カッコウの仲間で、ツツドリ、ホトトギスやカッコウと並び、市内に飛来する夏鳥です。ツツドリやホトトギスに比べ、標高の高い環境を好むため、あきる野市で安定的に見られる場所は養沢地区の一部で、飛来数も少なく数羽に限るとみられます。

密集した森林が多く存在するあきる野市の山地では目撃することが難しく、基本的には鳴き声のみの確認になっています。また、オオルリなどの森林性の野鳥の巣に托卵していると思われませんが、近年の確認回数は若干減少しているように感じています。托卵する野鳥の一部はシカの増加による被害を受けていることが想定されます。また、森林の変化や温暖化などは亜高山帯を好むジュウイチの飛来状況に影響していると思われる。あきる野市版レッドリストでは絶滅危惧Ⅱ類と指定されており、今後、あきる野

市で見られなくなる野鳥の一つであると考えられます。生息環境に影響するスギやヒノキの造林拡大、シカ対策などの必要性を指摘したいと思います。

#### ヤマシギ (*Scolopax rusticola*)

森林で見られるシギの仲間としては珍しい種類で、あきる野市では冬の間しか確認されません。主に丘陵地帯の谷間などに残る湿地や緩やかな小川周辺、稀に森林のギャップにある池周辺などで生息しており、夜間はより開けた場所にも現れるとみられます。

しかし、これまで確認できた場所は非常に限られ、静かな環境を好む印象が強く、見通しが悪い森林で確認したことが多いため、ミゾゴイと同様に実際の飛来個体数を特定することは難しい種です。このため、想定されているよりも数多く生息している可能性もありますが、決して数多くは生息していないと思われる。令和2年は偶然に外来種対策の調査により、よく出没した場所の確認ができたこと以外はほとんど出会えないため、記録があまりありません。環境の悪化や消失、さらには、外来種や大型哺乳類の増加による影響が大きいと想定されるため、ヤマシギは市内に飛来しなくなるおそれが高い種類の一つです。

#### コノハズク (*Otus scops*)

フクロウの仲間のコノハズクは、夏鳥で、かつては西多摩で複数箇所での営巣が確認されていたようです。現在は、確認の記録はほとんどなく、あきる野市でも平成22年6月と令和2年5月の夜間活動中に2例の鳴き声を確認したのみとなっています。

全国的に飛来する個体数の減少が心配されている種類で、現在、あきる野市では繁殖していないと思われます。山中の社寺などの巨木の樹洞が主な営巣場所であると考えられるため、伐採や枯損化、また、同じ樹洞を<sup>ねぐら</sup>とする他の動物との競争が、コノハズクの減少の原因の一つと思われます。

#### アカショウビン (*Halcyon coromanda*)

ヤマセミと並び、かつては秋川の名鳥でしたが、近年は全く確認できていない年が多くなっています。レンジャーの調査では、平成23年の夏、五日市周辺で1回の目撃のみになります。市民からの情報では、令和元年の梅雨の時期と令和3年の夏に鳴き声を確認したと寄せられています。市内で繁殖している証拠は、確認できていません。

他の野鳥と同様に日本に飛来する個体数の変動や、河川などのレイヤーの拡大、環境変化の影響を受けてきていると考えられますが、引き続き、注目していく必要があると思われる。

#### ヤマセミ (*Megaceryle lugubris*)

渓谷などに生息するヤマセミは、渡り鳥でなく、留鳥又は漂鳥になります。

かつては、秋川渓谷での繁殖はよく知られていましたが、過去12年間の調査では、市外からあきる野市の奥山地域に採餌などのために飛来するところを目撃している限りとなってしまいました。しかし、平成27年を境に目撃や情報提供も激減していますので、あきる野市で最も絶滅するおそれがある種類のひとつとみています。

最後にヤマセミを確認したのは令和2年の春になりますが、多くの野鳥の渡りの時期に目撃した個体で、票鳥としての一時的滞在の個体ではないかと思われます。

近年は、カワウなどによる魚類の捕食対策のため、河川に設置されているテグスなどが、個体数を減らしている原因のひとつであると思われます。

#### ブッポウソウ (*Eurystomus orientalis*)

独特で大人気の夏鳥であるブッポウソウは、平成22年まで市内で繁殖していましたが、現在は、あきる野市から姿を消したと考えられています。また、平成26年の梅雨頃に1羽を目撃しており、目撃した周辺で繁殖の可能性を調査しましたが、確認できなかったため、移動中の個体と判断しました。

ブッポウソウは、コノハズクと同様、巨木などの営巣場所の減少により、全国的に減少傾向にある野鳥ですが、巣箱の設置などの保護活動により、主に日本中部以西で回復している場所もあります。

#### サンショウクイ (*Pericrocotus divaricatus*) /

#### リュウキュウサンショウクイ (*Pericrocotus tegimae*)

サンショウクイは、かつて数多く飛来していた夏鳥です。一時、極端に少なくなってしまいましたが、近年は再び増加傾向にあると思われます。目立たない野鳥で目撃することが難しいため、鳴き声で確認することが多く、一般的にあまり知られていない野鳥です。

丘陵地や低山で進められている森林伐採などにより、やや開放的な環境を好むサンショウクイには生息に有利な状況になっている可能性が高いと思われます。

また、サンショウクイとの識別は困難であるリュウキュウサンショウクイは、かつて九州南部～南西諸島が北限でしたが、温暖化の影響か、生息範囲を北上してきた野鳥の一つです。レンジャーの調査で初めて確認したのは平成29年の2月で、以降、市内及び関東地方でも目撃情報が急増しているため、増加傾向にあると思われますが、現在、あきる野市版レッドリストでは情報不足（DD）に指定されています。

#### キクイタダキ (*Regulus regulus*)

亜高山帯から高山帯の森林で繁殖し、あきる野市には冬の間に来ます。カウ類などの群れに交じってたった数羽だけで移動することが多い小型の野鳥です。よく生い茂った常緑広葉樹や針葉樹林で確認することが多いです。体が小さく、鳴き声もあまり目

立たないため、特に混群に交じって移動している時は見逃すことがよくあると思われる。

この12年間の記録によると、減少傾向にある種類の一つになっています。平成24年から平成25年の間は多くの目撃記録がありますが、その後は、記録なしの年や少ない年となっていますので、何らかの理由で個体数やこの地域への飛来が減少したとみられます。

#### エゾムシクイ (*Phylloscopus borealoides*)

夏鳥で、標高の高い森林環境を好む種類ですが、渡りの時期は丘陵地などに現れることがあります。レンジャー活動を始めた頃、養沢の奥山で初夏の渡りの時期から梅雨の時期まで確認できていたため、繁殖していた可能性が高いと思われます。その後も、5月上旬の渡りの時期に限り、不規則にあきる野市の丘陵地から奥山までの範囲で現れていましたが、その機会も減少し、平成28年以降は全く確認していません。

減少している夏鳥として、より代表的な種であるコマドリやコルリと同様、亜高山環境でのニホンジカなどの増加により下層植生の消失など、直接的な被害を受けています。また、温暖化の影響もあり、今後は、あきる野市で長く滞在し繁殖することは考えにくくなっている野鳥です。

#### キレンジャク (*Bombycilla garrulous*) / ヒレンジャク (*Bombycilla japonica*)

キレンジャク、ヒレンジャクは、混合群を作り同時に現れることが多いため、記録をまとめることにしました。

この2種類は、冬鳥とはいえ、あきる野市周辺の地域では2月～4月に現れることが多く、多少の移動を行いながらやや長く滞在する場合や、渡りながら一時滞在する場合があります。

かつては飛来頻度や個体数が相当多かったと思われる2種類ですが、現在は希少な存在です。しかし、平成26年にヒレンジャク単独の数十羽の群れが飛来し、数週間程度同じ場所に留まったため、数回にわたり確認しました。また、キレンジャクは平成27年と令和2年に確認しました。そして、令和2年までの目撃は全て丘陵地帯となっていますが、令和3年の2月に市外の多摩川の河川敷で両種の群れを確認する機会があるなど、河川敷などの開放的な樹林環境を好むため、頻繁に飛来していることも考えられます。しかし、この12年の記録で増減を示す根拠もなく、毎年日本に飛来する個体数もよく変動すると言われている2種類であることから、この地域への依存性は比較的低いと感じています。

#### コマドリ (*Luscinia akahige*)

代表的な夏鳥で、かつてあきる野市の養沢地区などの標高の高い山地で繁殖していた

可能性があったため、この記録に取り入れることにしましたが、この12年間の記録では渡りの時期にしか確認できていません。

近年は年に1回程度の確認例というレベルで、渡りの際にあきる野市に飛来する頻度が低くなっていると思われます。エゾムシクイやコルリと同様、ニホンジカの増加などによる影響を受け、数を減らしている種類になっています。現在にあきる野市版レッドリストでコマドリは絶滅危惧Ⅱ類（VU）に指定されていますが、今後はあきる野市で確認する機会がさらに減ると予測しているため、どのようにランクを見直すべきかが課題です。

#### コルリ (*Luscinia cyane*)

エゾムシクイやコマドリと同様、代表的な亜高山性の夏鳥ですが、あきる野市周辺に飛来する個体数は非常に少ない野鳥です。

平成22年の梅雨頃は、あきる野市境付近の養沢奥部の山地で繁殖していたと思われる個体が見られましたが、平成23年以降は新たな記録はなく、渡りの時期でさえも確認できていません。

あきる野市版レッドリストでは絶滅危惧種の最も高いランクであるⅠ類（CR）に指定されていますが、エゾムシクイなどと同様、標高の高い森林内のササ類の群生などを必要とする野鳥であるため、ニホンジカの食害による下層植生の消失や温暖化などによる森林環境の変化の影響で、今後、コルリが再び市内で生息する可能性は低いと思われます。

#### ベニマシコ (*Uragus sibiricus*)

冬鳥で、大変人気のある野鳥として、あきる野市でもカメラマンに囲まれることがあります。最も森林環境からかけ離れている種類で、森林の伐採後の草地や、萱場、放置されて生い茂った農地、里山や河川敷の野原など、自然豊かな場所で確認しており、今回の希少野鳥の中で最も確認回数が多い種類の一つで、絶滅の心配は低いと言えます。

一方、台風やゲリラ豪雨により、河川敷にあったベニマシコの複数の生息場所で確認されなくなるなど、環境の変化に影響される種類であるため、引き続き注視する必要があります。

#### ミヤマホオジロ (*Emberiza elegans*)

あきる野市周辺の地域のもう一種※ニュアンス確認の冬鳥で、市内で確認できる場所の一部はベニマシコの生息地と重なりますが、ミヤマホオジロが好む環境は樹林や林縁部に偏り、崩落地、農地の中の林や林道、森林のギャップなどで確認しました。

平成29年には、確認が目立ちましたが、現在、ミヤマホオジロで出会うことは稀で、しかも長く同じ場所に留まらず、少しずつ移動している印象を受けています。また、個体数はもともと少ないと思われるため、増減の傾向などを見極めることは難しく、より

長いスパンで、より詳細な記録が必要な種類であると考えます。

## 2-4 その他の野鳥調査

### ○ 冬期のガンカモ類カウント調査

あきる野市周辺における越冬中のガンカモ類の飛来状況などを把握するための調査です。

調査方法は、11月から3月までの間（冬期）で、月2～3回、あきる野市内又はあきる野市の境界周辺の主な水辺環境で個体数のカウントを行っています。



ガンカモ類を目的とした調査ですが、シギやカイツブリ、クイナなどの仲間も合わせてカウントしているため、これらのデータの一部も表に含まれています。

今回のガンカモ類の調査の報告では、令和元～4年の調査結果（表1～6）を紹介するとともに、これまでの調査結果の推移（表7～11）と全国で行われるガンカモ類センサス（ガンカモ類の生息調査）の期間と重なった調査日のデータ（表12～14）も紹介します。

○ 令和元～4年の調査結果

〈各種類の月別最大個体数（1日の最大個体数）〈令和元～2年（表1）〉

種類		11月	12月	1月	2月	3月
ガンカモ類	ヒシクイ	0	0	0	0	0
	オシドリ	0	0	0	4	4
	オカヨシガモ	0	2	8	6	2
	ヨシガモ	0	4	6	2	0
	ヒドリガモ	0	0	0	0	0
	マガモ	54	87	75	71	43
	カルガモ	73	92	91	73	74
	ハシビロガモ	1	2	1	1	2
	オナガガモ	3	9	9	10	6
	トモエガモ	1	0	0	0	0
	コガモ	60	285	269	136	76
	ホシハジロ	0	0	0	2	0
	キンクロハジロ	0	4	5	10	9
	スズガモ	0	0	0	0	0
	シノリガモ	0	0	0	0	0
	ホオジロガモ	0	0	4	2	0
	ミヨアイサ	0	7	2	1	3
	カワアイサ	0	0	0	0	0
	ガンカモ類全種類	192	492	470	318	219
	その他	カイツブリ	4	7	9	10
カンムリカイツブリ		0	1	1	0	0
クイナ		0	0	0	0	0
バン		0	0	0	0	1
オオバン		3	9	9	7	7
ケリ		0	0	0	0	0
タゲリ		0	0	0	0	0
イカルチドリ		2	0	3	0	6
コチドリ		0	0	0	0	1
タシギ		0	0	0	0	0
クサシギ		0	0	1	1	0
キアシシギ		0	0	0	0	0
イソシギ		3	1	3	3	3
その他全種類		12	18	26	21	27

〈各種類の月別最大個体数（1日の最大個体数）〈令和2－3年（表2）〉

種類		11月	12月	1月	2月	3月	
ガン カ モ 類	ヒシクイ	0	0	0	0	0	
	オシドリ	24	13	31	38	35	
	オカヨシガモ	5	10	16	14	13	
	ヨシガモ	6	2	3	3	5	
	ヒドリガモ	2	1	3	1	0	
	マガモ	74	49	60	478	70	
	カルガモ	63	110	79	55	51	
	ハシビロガモ	0	1	0	0	0	
	オナガガモ	5	10	6	7	2	
	トモエガモ	0	0	0	3	0	
	コガモ	89	195	216	234	182	
	ホシハジロ	0	0	8	8	5	
	キンクロハジロ	0	9	16	12	12	
	スズガモ	0	0	0	0	0	
	シノリガモ	0	0	0	0	0	
	ホオジロガモ	0	1	7	4	0	
	ミコアイサ	0	4	7	3	6	
	カワアイサ	0	0	0	0	0	
	ガンカモ類全種類	268	405	452	860	381	
	そ の 他	カイツブリ	9	14	9	17	10
		カンムリカイツブリ	0	0	0	0	0
クイナ		1	0	0	0	2	
ヒクイナ		0	0	0	0	1	
バン		0	1	1	0	1	
オオバン		8	14	14	14	11	
タゲリ		1	0	0	0	0	
ケリ		0	0	0	0	0	
イカルチドリ		3	0	3	2	3	
コチドリ		0	0	0	0	0	
タシギ		0	0	0	0	1	
アオアシシギ		0	0	0	0	0	
クサシギ		2	0	0	0	0	
キアシシギ		0	0	0	0	0	
イソシギ		7	3	1	4	1	
その他全種類		31	32	28	37	30	

〈各種類の月別最大個体数（1日の最大個体数）〈令和3～4年（表3）〉

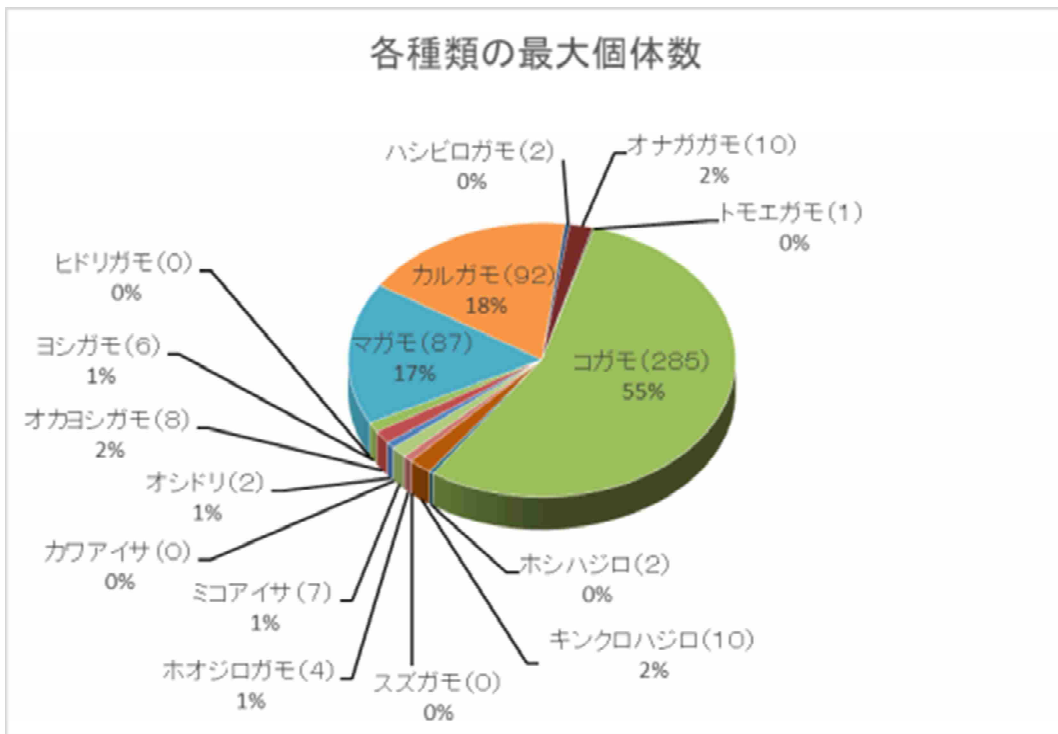
種類		11月	12月	1月	2月	3月
ガンカモ類	ヒシクイ	0	0	0	0	0
	マガン	0	0	0	0	0
	オシドリ	2	20	11	12	18
	オカヨシガモ	20	23	20	15	12
	ヨシガモ	8	4	10	12	12
	ヒドリガモ	14	0	0	1	0
	マガモ	73	83	154	355	122
	カルガモ	60	92	89	101	79
	ハシビロガモ	0	1	0	0	2
	オナガガモ	2	4	1	9	0
	トモエガモ	0	3	1	8	0
	コガモ	61	101	221	266	166
	ホシハジロ	0	3	8	5	7
	キンクロハジロ	4	8	11	17	17
	スズガモ	0	0	0	0	0
	シノリガモ	0	0	0	0	0
	ホオジロガモ	0	0	0	2	0
	ミコアイサ	2	3	10	14	1
	カワアイサ	3	0	3	0	0
	ガンカモ類全種類	249	345	539	817	436
その他	カイツブリ	10	12	18	16	7
	カンムリカイツブリ	0	0	0	0	0
	クイナ	0	0	0	0	0
	ヒクイナ	0	0	1	0	0
	バン	3	1	1	0	0
	オオバン	54	43	27	46	34
	タゲリ	0	0	0	0	0
	ケリ	0	0	0	0	0
	イカルチドリ	16	2	9	5	4
	コチドリ	0	0	0	0	0
	タシギ	0	1	0	0	0
	アオアシシギ	0	0	0	0	0
	クサシギ	1	0	1	0	1
	キアシシギ	0	0	0	0	0
	イソシギ	1	1	0	2	0
	その他全種類	85	60	57	69	46

- ・月別に、全地区で1日に確認した個体数が最大となったものを示しています。
- ・種類は、平成22年からのレンジャー活動の中で確認又は報告があった種です。

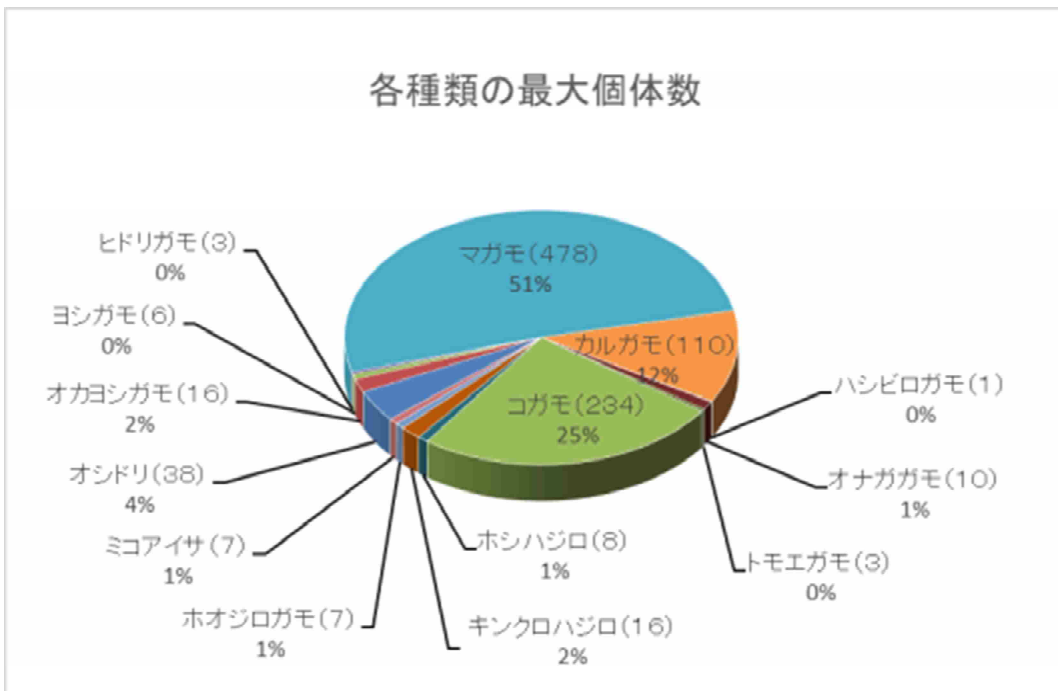
表1～3は、調査で得られた最も重要なデータで、地域に飛来する個体数を表すデータとなっています。個体数のピークの多くは最も気温が低い1月中旬～2月中旬の間に確認しましたが、寒波の影響などにより、12月～2月の間で、変動することがあります。

次の表は、各調査期間を通して各種の最大個体数の割合が比較できる3期の各グラフです。

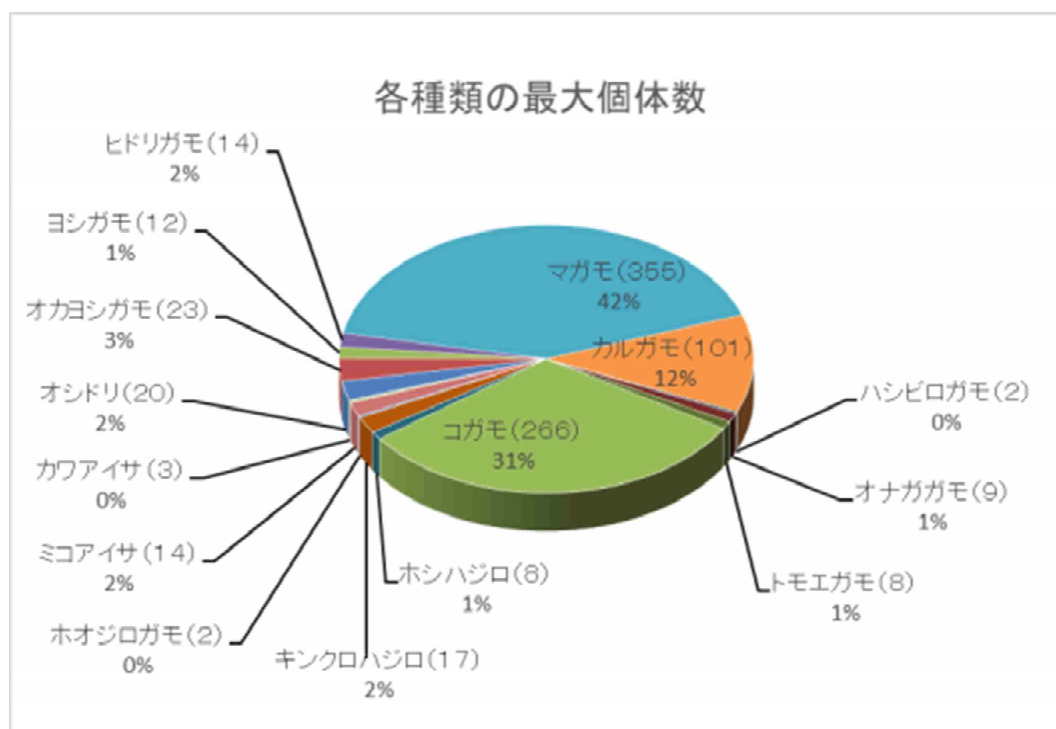
〈令和元-2年（表4）〉



〈令和2-3年（表5）〉



〈令和3-4年（表6）〉



○ ガンカモ類の推移

本調査を始めた平成27年11月から令和4年3月までの7年間のデータを集計しました。

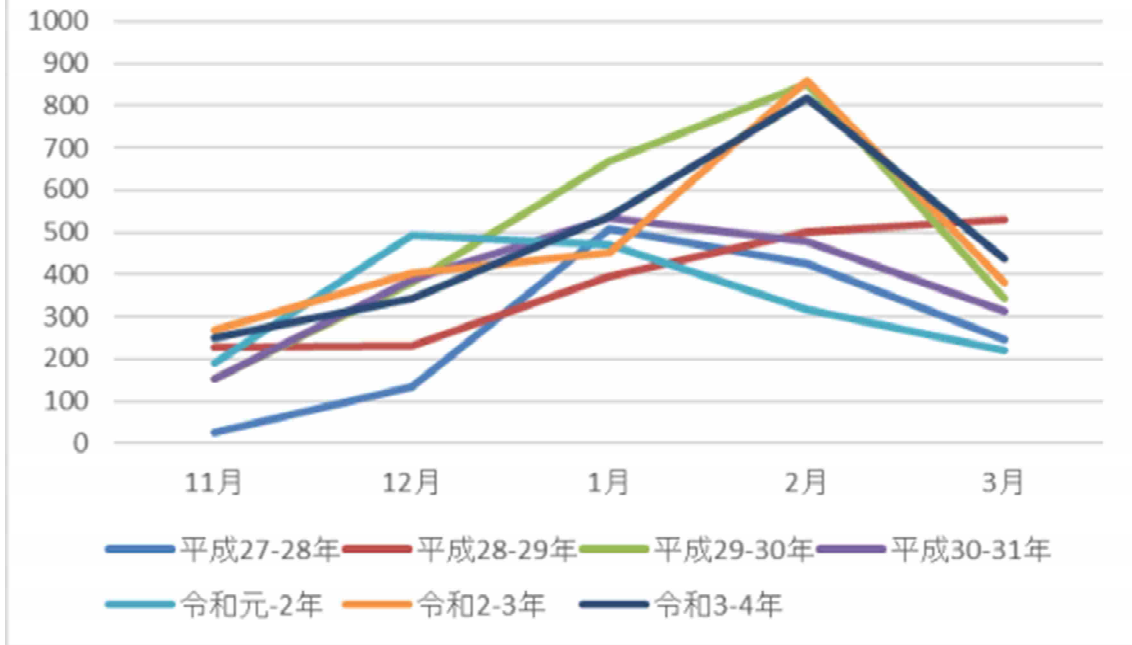
全種類（表7）、マガモ（表8）、カルガモ（表9）、コガモ（表10）、ガンカモ類その他（マガモ、カルガモ、コガモ以外の種類）（表11）の1日の最大個体数です。

〈ガンカモ類の月別最大個体数の推移（各種1日の最大個体数合計）（表7）〉

	11月	12月	1月	2月	3月
平成27-28年	27	133	508	425	247
平成28-29年	226	233	397	500	531
平成29-30年	152	379	667	852	342
平成30-31年	153	387	533	479	315
令和元-2年	192	492	470	318	219
令和2-3年	268	405	452	860	381
令和3-4年	249	345	539	817	436

- ・平成27-28年の11月、12月分は調査不足
- ・赤字は最大値

全種類の月別最大個体数の推移グラフ



令和2-3年の最大個体数（860羽）は、調査を実施した7年間で最も数が多くなりましたが、強い寒波が到来した平成29-30年や令和3-4年の冬の最大個体数とほぼ一致しています。

他の年は、目立った変動は見られませんが、ガンカモ類全種の個体数のピークは500羽～900羽の間で大きく変動しています。

変動の大きな理由は、平成29-30年、令和3-4年の強い寒波が到来したことに伴うコガモやマガモの個体数の増加が目立ちます。また、令和2-3年は、比較的暖冬でしたが、マガモの個体数の急増が見られました。

最大個体数のピークは12月から3月までの間で変動し、3期分のピークは2月、2期分のピークは1月と、残りの2期分のピークはそれぞれ12月と3月中になりました。暖冬又は積雪の少ない年は、1月頃がピークとなり、冬の寒さが厳しい年は、主に2月中がピークとなっていますが、気候の影響で更にピークの時期が前後することが見られることもあります。

種類に関しては、大きな変動はなく、毎年13種類前後を確認しています（最少12種、最多15種）。これまでに確認できた種類は、全部で16種類（オシドリ、オカヨシガモ、ヨシガモ、ヒドリガモ、マガモ、カルガモ、ハシビロガモ、オナガガモ、トモエガモ、コガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、スズガモ、ホオシロガモ、ミコアイサ、カワアイサ）となります。さらに、調査期間以外にマガンの確認と、4種類の情報も寄せられているため、1年を通して21種類のガンカモ類があきる野市に飛来する年もあ

ることが分かっています。

また、あきる野市周辺の代表的なガンカモ類であるマガモやカルガモ（あきる野市においては繁殖をする留鳥や漂鳥）、コガモ（あきる野市においては基本的に冬鳥）の個体数は最も多いため、種類ごとの推移を見ることで、市内の総合越冬個体数の変動などの詳細が分かります。

〈マガモの月別最大個体数の推移（1日の最大個体数）（表8）〉

	11月	12月	1月	2月	3月
平成27-28年	4	23	108	83	67
平成28-29年	65	60	53	79	133
平成29-30年	40	69	70	84	70
平成30-31年	62	70	93	125	64
令和元-2年	54	87	75	71	43
令和2-3年	74	49	60	478	70
令和3-4年	73	83	154	355	122

マガモの最大個体数のピークは比較的遅く、各年の数にも不規則な変動が見られています。また、ピークは12月～3月の間と幅広いですが、2月が最も多くなっています。

最も数が多いのは、令和2-3年の478羽、令和3-4年の記録的寒波の際も355羽と例年よりもかなり多くなりました。しかし、平成29-30年の強い寒波が到来した際は、84羽と数が少ないなど、不規則な変動が起きているようです。他の年は、100羽から140羽までの範囲内で変動しましたが、令和2-3年からの個体数を見ると、増加傾向にある可能性があります。

なお、多くの年のガンカモ類全種類の最大個体数のピークはマガモのピークと重なっているため、マガモは全種の最大個体数と大きく関係していることが分かります。

〈カルガモの月別最大個体数の推移（1日の最大個体数）（表9）〉

	11月	12月	1月	2月	3月
平成27-28年	23	64	105	92	32
平成28-29年	68	72	67	79	70
平成29-30年	71	122	113	120	61
平成30-31年	60	133	110	85	90
令和元-2年	73	92	91	73	74
令和2-3年	63	110	79	55	51
令和3-4年	60	92	89	101	79

カルガモの最大個体数のピークは、平年、年末年始の前後で、その後、多くの個体が多い温暖地へ移動していきます。また、2月がピークの年もありますが、これは既に北上中の個体と思われます。

カルガモは、マガモより安定的な個体数を保っていますが、平成28-29年は、79羽と少なく、その後、増加傾向となりましたが、令和に入ってから再び緩やかな減少が起きました。

結果は、平年並みの約100~110羽が越冬のために飛来しており、大きな変動は見られませんが、市内でも繁殖する種類であるため、今後、注目すべき種類になる可能性があります。

〈コガモの月別最大個体数の推移（1日の最大個体数）（表10）〉

	11月	12月	1月	2月	3月
平成27-28年	0	25	238	200	122
平成28-29年	57	58	217	277	273
平成29-30年	19	144	405	567	192
平成30-31年	22	117	252	232	122
令和元-2年	60	285	269	136	76
令和2-3年	89	195	216	234	182
令和3-4年	61	101	221	266	166

コガモの個体数のピークは、平年、1月~2月と、最も寒い時期や積雪が多い時期になる傾向があります。

かつて、コガモはガンカモ類の中で最も数が多かったとされています。近年は、マガモの数が最も多くなってきているため、主役交代が起きているとみられますが、数が多い種類であるため、全種類の最大個体数の結果に大きな影響を与える種類となっています。

コガモの個体数は、強い寒波が到来した平成29-30年は、最大個体数567羽と例年の約2倍を確認しました。他の年は、約230羽~280羽までの範囲で推移しており、カルガモと同様に大きな変動は見られません。

〈その他ガンカモ類の月別最大個体数の推移（1日の最大個体数）（表11）〉

	11月	12月	1月	2月	3月
平成27-28年	0	21	57	50	20
平成28-29年	36	43	60	65	55
平成29-30年	22	44	79	81	19
平成30-31年	9	67	78	37	39
令和元-2年	5	28	35	38	26
令和2-3年	42	51	97	45	78
令和3-4年	55	69	75	87	69

その他の13種類は、あきる野市周辺では個体数が各種類50羽以下、その内11種類は20羽以下と少ないため、傾向を見極めるのは難しい状況です。

これまで13種類の最大個体数は、令和2-3年の97羽ですが、強い寒波の年でも80羽以上が飛来しました。一方、最も数が少ない年は、最大の年の半分以下で、38羽となりました。

生息状況を見極めるのは難しい状況ではありますが、キンクロハジロ、トモエガモ、ヒドリガモは、少数ながら増加が見られますが、オナガガモは減少している印象です。ヒドリガモは、かつて、数が多かったものの、滅多に飛来しなくなりました。一方、令和3年の秋の渡りの頃、群れで数週間も滞在したこともありました。トモエガモは、都内に飛来する数が非常に少ない中で、令和に入ってからあきる野市に飛来する数が増えました。その他の種類も、若干の変化が見られながら、今後の傾向を見続ける必要があるものが多いと思われます。

#### ○ 全国一斉「ガンカモ類の生息調査」について

毎年1月中旬に全国各地のガンカモ類センサス（ガンカモ類の生息調査）が実施されています。同期間に実施した森林レンジャーの調査記録も参考資料として紹介したいと思います。この記録も他の調査同様、令和2年から4年までの分となります。

〈令和2年1月14日（表12）〉

種類		個体数
ガンカモ類	ヒシクイ	0
	マガン	0
	オシドリ	0
	オカヨシガモ	4
	ヨシガモ	2
	ヒドリガモ	0
	マガモ	75
	カルガモ	76
	ハシビロガモ	1
	オナガガモ	9
	トモエガモ	0
	コガモ	190
	ホシハジロ	0
	キンクロハジロ	2
	スズガモ	0
	シノリガモ	0
	ホオジロガモ	4
	ミコアイサ	0
カワアイサ	0	
ガンカモ類全種類	363	

種類		個体数
その他	カイツブリ	9
	カンムリカイツブリ	0
	クイナ	0
	ヒクイナ	0
	バン	0
	オオバン	9
	ケリ	0
	タゲリ	0
	イカルチドリ	3
	コチドリ	0
	タシギ	0
	クサシギ	1
	キアシシギ	0
	イソシギ	3
その他全種類	25	

〈令和3年1月13日（表13）〉

種類		個体数
ガンカモ類	ヒシクイ	0
	マガン	0
	オシドリ	24
	オカヨシガモ	16
	ヨシガモ	3
	ヒドリガモ	2
	マガモ	58
	カルガモ	79
	ハシビロガモ	0
	オナガガモ	3
	トモエガモ	0
	コガモ	195
	ホシハジロ	6
	キンクロハジロ	14
	スズガモ	0
	シノリガモ	0
	ホオジロガモ	0
	ミコアイサ	3
カワアイサ	0	
ガンカモ類全種類	403	

種類		個体数
その他	カイツブリ	9
	カンムリカイツブリ	0
	クイナ	0
	ヒクイナ	0
	バン	0
	オオバン	11
	タゲリ	0
	ケリ	0
	イカルチドリ	0
	コチドリ	0
	タシギ	0
	アオアシシギ	0
	クサシギ	0
	キアシシギ	0
イソシギ	0	
その他全種類	20	

〈令和4年1月18日（表14）〉

種類		個体数
ガンカモ類	ヒシクイ	0
	マガン	0
	オシドリ	4
	オカヨシガモ	14
	ヨシガモ	10
	ヒドリガモ	0
	マガモ	124
	カルガモ	89
	ハシビロガモ	0
	オナガガモ	1
	トモエガモ	1
	コガモ	192
	ホシハジロ	8
	キンクロハジロ	11
	スズガモ	0
	シノリガモ	0
	ホオジロガモ	0
	ミコアイサ	10
	カワアイサ	0
ガンカモ類全種類	464	

種類		個体数
その他	カイツブリ	18
	カンムリカイツブリ	0
	クイナ	0
	ヒクイナ	0
	バン	0
	オオバン	27
	タゲリ	0
	ケリ	0
	イカルチドリ	9
	コチドリ	0
	タシギ	0
	アオアシシギ	0
	クサシギ	0
	キアシシギ	0
	イソシギ	0
	その他全種類	54

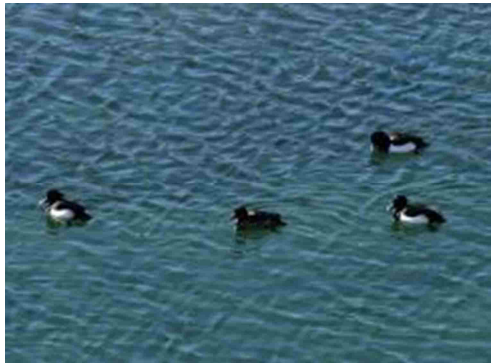
○ ガンカモ類についてのまとめ

20世紀後半から、全国的に多くのガンカモ類が減少したと言われているため、市内の現状を明確にすることを目的に本調査を始めました。7年の調査期間では、マガモのように増加が考えられる種類もありましたが、ほとんどの種類に大きな変化は見られませんでした。しかし、多くの種類の飛来数は非常に少ないため、多様性の低下が起きていることは十分に考えられます。

また、変動の理由については、寒波の影響などの気候変動以外にはっきりとした傾向を解明することはできませんでした。

生息環境の変化の影響についても詳細な理由を示さない結果となっていますが、台風や豪雨による河川敷の環境の変化、災害に伴う河川の復旧工事、さらには、魚類を守るテグス設置なども、ガンカモ類の飛来場所の減少に影響していると確認しています。

今後もガンカモ類の調査を継続していきたいと思っています。



【キンクロハジロの小群れ】

主に多摩川に飛来します。転々と移動したり、個体が入れ替わったりしますが、数は多くありません。



【ヒドリガモ】

かつて、数多くが飛来していたようですが、近年は少数しか見られません。



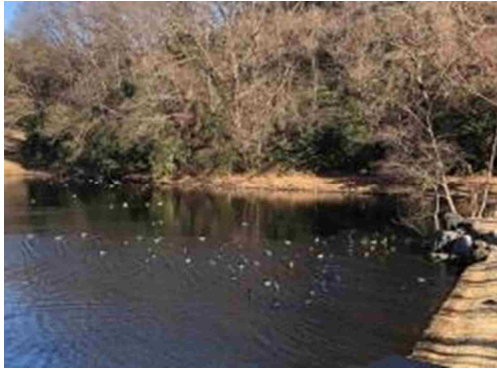
【多摩川上空のカモの群れ】

マガモの群れですが、中にハシビロガモが1羽混じっています（右側で囲まれている1羽）。ガンカモ類は混群になることがよくあります。



【カルガモ・マガモ・トモエガモの小群れ】

市内で最も多く見られるガンカモ類であるマガモやカルガモと希少な種類であるトモエガモの群れです。トモエガモは令和元年以降に数回飛来したことを確認しました。



公園や河川敷に大きな池が少ないあきる野市では、ゴルフ場などの池が鳥類にとって安定した水場です。

越冬中のガンカモ類にとっても、重要な場所となっていますので、過去最高記録のマガモ434羽の群れがこのような池に訪れました。



河川敷の所々で見られる自然の湿地や池などの水辺環境は、ガンカモ類だけでなく、他の野鳥や昆虫類などに大変重要な場所となっています。

人間活動の影響を受けるため、このような場所の保全が望ましいと考えています。



平成30～令和3年の冬期は、極端な乾燥により、多くの水辺環境が干上がってしまいました。強い寒波の年は凍結する場所も増えるため、ガンカモ類の飛来状況に大きく影響を与えます。



令和元年に発生した台風19号により、水辺環境が広い範囲で影響を受けました。川の流れや河川敷の池などの状況が変わり、ガンカモ類だけでなく、多くの生物の住処や餌場などに影響が見られました。

